

中日新聞社 二〇一三年二月一七日

「二月二十一日 ある死刑囚の記録」一 『「ら」に埋もれた最後』

二〇一三年二月二十一日午前八時すぎ。名古屋は気温一・三度と平年より少々冷え込んでいた。

その男は刑務官に呼ばれ、名古屋拘置所の自身の房を出た。窓から真っ青な空がのぞいている。

「死を待ち続ける生活に疲れました」

男は拘置所の関係者にそんなことを言い残し“奈落”へ続く踏み板の上に乗ったという。

加納（旧姓武藤）恵喜（けいき）、六十二歳。第二次安倍晋三政権の発足後、初めて刑を執行された死刑囚三人のうちの一人だ。

〇二年、名古屋・栄でスナックの女性経営者（61）を殺害し、八千円を奪った。強盗殺人罪で一審無期懲役、二審死刑を経て〇七年、最高裁で死刑が確定していた。それ以前、一九八三年には長野県の旅館で女将（おかみ）（64）を殺

害後、二万円を盗み、懲役十五年で服役してもいる。

罪無き二人の命を奪った恵喜。本紙は彼が支援者たちと交わした九百通を超える手紙や絵はがきを入手した。

その中で彼はこう自問している。「償いとは何なのか」。二月二十一日、果たして答えは出たのだろうか。手紙や関係者の証言でその人生の記録をひもとき、考える。



もう屋上の運動場から名古屋城の桜を見ることもない。加納（旧姓武藤）恵喜（けいき）に春はやって来ない。

二〇一三年二月二十一日。名古屋拘置所・西館八階にあったという房を出た恵喜をフロア中央のエレベーターホールで四〇五人の刑務官が待ち構えていた。

エレベーターで二階へ降りた後、地下一階の刑場までは階段を下る。一步、また一步…。

さかのぼること十一年前。名古屋・栄でスナック経営者を殺（あや）めてから二カ月後、獄中の恵喜は知り合ったばかりの牧師にあて、こんなことを手紙に記している。

「天涯孤独でけっこうと言いながら、心の中では親兄弟に会いたいし、真から話のできる友が今回程ほしいと思った事は有りません」

かつて養蚕で栄えた長野県北部の街。妙高、斑尾（まだらお）など北信五岳を遠く眺める地で、恵喜は青果店を営む両親の間、三人兄弟の真ん中で生まれた。

家が近所で、同じ小学校の一年先輩というギンジ（仮名）はこう語る。「ああ、よくいっしょに遊んだよ。元気にしてんのかなあ…」。恵喜の刑死をいまだ知らない。

無理もない。

恵喜たち三人の死刑囚の刑の執行が発表されたのは午前十一時ちようど。法相の谷垣禎一が会見場でたんたと伝えた。直後、各メディアが三人の名前を速報した。例えば、ある民放キー局のテロップはこうだ。「奈良女兒誘拐殺人の小林

薫死刑囚、土浦連続殺傷の金川真大（まさひろ）死刑囚ら三人」

小林といえは〇四年、七歳の女兒を殺し、遺体の画像を母親に送り付けた男。

金川は〇八年、無差別に九人を殺傷し「死刑になりたかった」と言い放った。

ともに世を震撼（しんかん）させたといえるほどの殺人者。あえて比べるなら、ありふれた死刑囚といえる男は「ら」の中に埋もれ、大抵のニュースはその死をついでのように報じた。小林、金川に比べ、翌日以降の続報も皆無に近い。

長野県で暮らす恵喜の実兄（66）がその死に気付いたのもたまたま、だった。

（敬称略）

◎上記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『ウソつき きんごろー』

「やろう、死刑になったわ」

「ああ、そうかい」

二〇一三年二月二十一日。加納（旧姓武藤）恵喜（けいき）の死刑が執行され

近ごろ、体が弱り、伏せりがちの母がそれだけ、ぼつり。

たその日の昼どき、恵喜の実の兄（66）は長野県の自宅の居間で何となくテレビを眺めていた。

父は鉄工所などで汗を流し、一家にひもじい思いはさせなかった。

よく笑い、よく笑わせる。恵喜はそんな少年だった。

「かのう、旧姓『むとう』けいき…」

近所でのあだ名は「きんごろー」。明治から昭和にかけ「爆笑王」とたたえら

「えっ」

れた落語家・柳家金語楼が由来というから、その口達者ぶりがうかがえる。

アナウンサーが旧姓も読んでくれなかったら、聞き逃したかもしれない。

が、それも度が過ぎては笑えない。当時を記憶する幾人もが口をそろえる、き

執行に先立つこと九年前、恵喜がある支援者夫妻の養子となり、武藤姓を捨て

んごろーの質（たち）。「ウソつき」

たことを兄は知らなかった。

すし屋に偽の出前を頼んだり、開くあてのない数十人の宴会を予約する。

「本当は『ぶとう』なんだが」

「もうしません」。父に叱られるたび涙ながらに謝るが、すぐにまた…。兄は

短いニュースの中、名字の読みすら間違えられた弟だが、ふびんと思うのも煩

やがて理解した。「自分を大きく見せようとでたらめ言って、收拾がつかなくな

恵喜は獄中からの支援者への手紙で母のこんなエピソードを記している。

いわく戦時中、満州と呼ばれた中国東北部へ渡った母が引き揚げ途中、生後三カ月の赤ちゃんを亡くした。母は作家藤原ていの戦後のベストセラー小説「流れる星は生きている」のモデルになった。本当は母が満州へ渡ったことなどない。きんごろーのころからそうだった。大した意味も無く、すぐにばれるウソをつく。

恵喜は中学を出ると実家を離れ、住まいや職を転々とする。二十代半ばから食い逃げや盗みで出ては戻りの刑務所暮らし。そして、三十二歳の時、ついには人を殺（あや）めることになる。（敬称略）

◎上記記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

中日新聞社 二〇一三年一月一九日

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『一人目。旅館の女将』

山あいにある長野県諏訪市の冬は、氷点下にこごえるのが常だ。

一九八三年二月五日。その日、諏訪湖では、湖面に張った氷がせり上がってで  
きる神の道「御神（おみ）渡り」の具合を見て、一年の吉凶を占う神事が執り行  
われていた。

湖畔から歩いて五分の「山彦旅館」には三日前から、やせた男の客が一人。熱  
心な見物客ではない。三十二歳の武藤恵喜（ぶとうけいき）だった。

このころ、有り金が尽き、東京で無銭飲食を繰り返していた恵喜は、塀の中で  
知り合った暴力団員を頼り、この地へ流れ着いた。

部屋数六つの小さな宿には九年前に夫と死別した六十四歳の女将（おかみ）、  
伊藤美遊登（みゆと）しかない。「怖いから、知らない人は泊めたくない」。常々、

口にしていたはずが、なぜか、いちげんの恵喜を迎え入れた。

その日、恵喜はあてにした暴力団員から仕事の口利きをしてもらえず、昼を過  
ぎても二階の「羽衣の間」でテレビを見ていた。

「映りが悪い」

「代金を払ってから文句は言って」

カッとなった恵喜が突き倒す。女将は近くにあった靴べらを握り、必死に振り  
回した。恵喜はうまく避けて背後に回ると、首に手をかけた。すぐにぐったりし  
たが、恵喜は念を入れ、電気コタツのコードで絞め直した。判決文による事件  
のあらましだ。

帳場から二万円と預金通帳を盗んで逃げた恵喜は指名手配され、二週間後、東  
京・浅草の喫茶店で警官に見つかると、所持金は三十九円。コーヒー一杯も飲めな  
い額だった。

八三年十月、長野地裁は殺人、窃盗罪などで懲役十五年（求刑二十年）の判決  
を下した。

国選弁護人を務めた御園広実（77）は判決後の接見でこう語りかけたという。

「刑務所で悪知恵を付けるんじゃないぞ。出てきて街で会ったら声を掛けてこい」

そのときの姿が忘れられない。「もっと早く先生と出会っていれば…」。恵喜は涙ながらに言った。

本気で悔やんでいる…。御園は信じた。

事件を知った母は四国を遍路し、女将のために祈り続けた。月に一度、獄中の息子へ送った手紙に改心を願う母心をつづった。

しかし、恵喜は服役した岐阜刑務所時代の心境を、後の支援者への手紙で打ち明けている。「はじめは本当に反省の気持ちが強かったのですが、次第に薄れていったのです」（敬称略）

◎上記記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

中日新聞社 二〇一三年二月二〇日

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『うそ、罪 うそ、罪…』

JR岐阜駅近く。二十人も入れば満席の小さな居酒屋だった。隅っここの二人掛けのテーブルにはビールや小料理が大して口を付けられずに残っている。

「よくしゃべるなあ…」。中日新聞岐阜総局（当時）で県警を担当していた記者、市川真（31）は半ば、あきれていた。

一九九八年七月二十二日夜。向かいに座る男は「むとう、のりよし」と名乗った。

姓名の読みは変えていたが、もちろん、武藤恵喜（ぶとうけいき）である。長野県諏訪市で旅館の女将（おかみ）（64）を殺害、懲役十五年の刑期を終え、

三カ月前に岐阜刑務所を仮出所したばかりだった。

恵喜は岐阜総局への電話で信用調査会社員だと自らを売り込み、二年前に岐阜県御嵩町で起きた町長襲撃事件の情報を提供したいと市川を呼び出した。

「電車賃を出してくれ」「情報料だ。三千円でいいから」。延々と噂（うわさ）

に毛の生えた程度の話をした後、カネの無心を始め、断つてもしつこく粘った。

後日、市川は旅行会社から身に覚えのない欧州旅行の代金七十万円を請求され

る。だが申し込んだか人相を聞けば、あの男。カネにありつけなかった腹いせに、市川の名刺を悪用したらしい。

「豊橋（愛知県）の保護司に世話になり、仕事をしている」。仮出所の直後、

恵喜は故郷、長野県の母あての手紙にこうつぶっている。確かにこのころ本籍地を豊橋市に移しているが、その住所は保護司ではなく、暴力団員の居宅だった。

まともに仕事を続けた形跡もない。

結局、恵喜は岐阜刑務所を出て一年半後の九九年十月、スナックでママのバッグを盗んだ疑いで名古屋・中署に逮捕される。

大手企業のエリート社員や画廊経営者、有名タレントの知り合い…。本当の自

分とはほど遠いだれかに化け、飲食店でカネを盗んだり、代金を踏み倒したりと、似た手口の余罪が四十件ほど。名古屋地裁の判決は懲役二年二カ月だった。

そして、五度目の刑務所暮らしを終え、また、たった二カ月であの夜がやってくる。

二〇〇二年三月十三日。前日、誕生日を迎え、恵喜は五十二歳になっていた。

いつものようにカネが尽き、いつものように夜の街をぶらつく。従業員も客も

人が少ないところがいい…。

名古屋・栄の雑居ビル三階、店名「パティオ」。古ぼけた木のドアを開くと、

初老のママがひとり、目に映った。 Ⅱ 続く (敬称略)

◎上記の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---



【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『狙われた幸せの“中庭”』

前年からの暖冬で、近くの公園の桜は、つぼみがほころびかけていた。IT不況からの回復はまだ緒に就いたばかりで、名古屋有数の歓楽街、栄四丁目も盛況とはいかない。

二〇〇二年三月十三日夜。雑居ビルの三階にあるスナック「パティオ」ではママの千葉春江（61）が、あまり使わないボックス席で暇を持て余していた。

春江は、かかあ天下とからっ風で聞こえる上州、群馬県桐生市の生まれだ。下に妹が一人。四歳で迎えた終戦の年に父が亡くなった。

母と姉妹、女ばかり三人の暮らしは楽ではない。幼いときから、炊事に洗濯と病気がちな母を支え、中学に入ると、学業の傍ら、織物工場で働き、家計を助けた。二十代になると地元の結婚式場で、客あしらいを覚えながら、独学で調理師

免許を手に行っている。

自分の店を持ちたい。そんな夢を描き、名古屋で水商売の世界に飛び込んだ

のが三十路（みそじ）に入ったころ。一度目の結婚に失敗したすぐ後だった。

クラブのホステスとしては初々しく、それでいて鷹揚な物腰。ひいきにしてくれる客はすぐついた。二つ年上で、金融関係の仕事をしていた須藤正夫（仮名）もその一人。

三年ほどこつこつためた金と、正夫の力添えで念願の店をオープンしたのが一九七九年のことだ。

「こんなに早く店が持てるなんて」。春江は正夫の前で子供のように喜んだ。

スペイン語で「中庭」を意味する店は、居心地の良さで常連客をつかみ、二十年を祝うまで歳月を刻んだ。

籍こそ入れなかったが、いつからか正夫と同居を始め、前妻との間の娘二人もわが子のようにかわいがった。ささやかだが「幸せ」を手にした、そんなころ。

武藤恵喜（ぶとうけいき）が店のドアを開ける。

「何時までやってますか」

時計の針は午後十一時を指そうとしていた。ふだん、店は午前零時で終わり。いちげん客も入れない。売り上げの落ち込みが気にかかったのだろうか。

「時間は気にしなくていいから、飲んでいってくださいよ」

恵喜はカウンターに腰掛け「安藤」と名乗った。

日付が変わり、店を閉めた向かいのスナックのママ田中しげ子（52）が「パティオ」から漏れる男の歌声を聞いている。「千葉さん、きょうは遅くまでお客さん入って、良かったわ」。そんなことを思った。 Ⅱ 続く（敬称略）

◎上記の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『二人目。スナックママ』

日付が変わって一時間はすぎた。

二〇〇二年三月十四日。ホワイトデーを迎えた名古屋・栄のスナック「パーティオ」で、武藤恵喜（ぶとうけいき）は少し、焦り始めていた。

売上金を盗もうとしても、ママ千葉春江（61）にすぎがない。

「たばこ、無くなっちゃったな」

「たばこは置いてないのよ」。外へ買いに行くよう仕向けても軽くないなされ、

春江は腰を上げない。

「ちょっと、仲間を迎えに行ってくる」。逃げようかと表へ出たが、後をつけ

てきた春江に腕を絡めて引き戻された。

春江はトイレに立ったときでさえ、ドアを半開きにしてこちらをうかがっているように感じる。

夜は深まり、もう午前三時。懐のカネではここの支払いも、できない。また、

刑務所には戻りたくない。いっそのこと…。

恵喜は、隣に腰掛けていた春江の椅子に手を掛け、一気に後ろに引き倒した。

「初めからおかしいと思ったんだ」。そう叫ぶ春江の口を押さえ、起き上がりすると、後ろから首に左腕を回して力を込めた。

「ぐうっ」。春江の口からくぐもった声が漏れる。恵喜はカウンターの上にあったカラオケマイクをつかみ、その首にコードを巻き付けた…。

後の裁判で明らかにされたところでは、その夜、恵喜はこうして人生で二人目となる命を奪った。

当時、名古屋市立大で春江の司法解剖を担当した法医学者長尾正崇（まさたか）

（52）は、恵喜がどうやって春江を絞殺したのか再現してみた。

コードを二重に回し、簡単にほどけないよう首の後ろで、しっかり結んであった。春江の首の左側には自らの爪で引っかいたような傷が二つ。引きはがそうと、

もがく春江を冷静に絞め続けたのだろう。

「殺そうとして殺している。人の命を奪うことに迷いがない」。千体以上の解剖を手掛けてきた長尾の経験がそう告げた。

恵喜は春江を殺害した後、グラスやカウンターの指紋を丁寧にぬぐった。暴行目的を装い、春江の衣服の一部を脱がしてもいる。

そうして奪った売上金は八千円だった。

事件が起きた午前三時ごろ、春江と同居する須藤正夫（仮名）が、帰りが遅いのを心配して春江の携帯や店へ電話している。だれも出ない。眠れぬまま迎えた朝、正夫は店へ駆けつけた。 Ⅱ 続く （敬称略）

◎上記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『女房の無念のみんだ』

見慣れた店がまったく様変わりしていた。

二〇〇二年三月十四日午前九時すぎ。名古屋・栄の雑居ビル三階にあるスナック「パティオ」には制服姿の警官が慌ただしく出入りしている。

須藤正夫（仮名）が警官の制止を振り切り、店に入ると、変わり果てた「女房」が床にごろりと転がっていた。

その後のことを正夫はよく覚えていない。腰が抜けたか、捜査員に抱きかかえられ、店を出た気がする。

殺されたママ千葉春江（61）。籍は入っていなかったが、正夫は確かに夫だった。

出会ったのは、お互い三十代半ばをすぎたころ。二つ年下の春江は、栄のクラブでピアノの生演奏に合わせて歌っていた。仕事の金融業が順調だったところで足

しげく通い詰めたが、まったくこびようとしな

二年ほどで、正夫は家族に春江を引き合わせることになる。前妻との間の小学生、中学生二人の娘たち。名古屋市内の肉料理店での会食は緊張で身が縮こまった。

ある日、正夫は母親のいない台所で、娘が不慣れな手つきで、フライパンになみなみと油を注ぐのを目にした。ひどく危なっかしい。

そんなことに背を押された。春江となら家族になれると思った。

「いつしよに暮らしてくれんか」

春江はうなずいた。

四人で食卓を囲む日々。手づくりのみそ汁で朝が始まる。

休みのたび、温泉やスキーにも出掛けた。例えば、富山・宇奈月温泉に出かけたときは大雪で列車が立ち往生し、四人でスナック菓子を分けながら、すきつ腹

に耐えた。

娘二人が独立し、こんどはのんびり小料理屋でもやろうか、そんな話もしてい

た。それなのに…。

事件から二日すぎた三月十六日。春江の葬儀が名古屋市内の斎場で営まれた。

焼き場から出てきた亡きがら。

これからもいっしょだー。

正夫は骨片を左手でひとつかみすると、口に押し込み、バリバリとかみ砕きながらのんだ。手のひらが焼けるように熱かった。

その直後、正夫の携帯が鳴る。

「犯人、逮捕したで」

武藤恵喜（ぶとうけいき）…。捜査員が口にしたのは一度も耳にしたことのない名前だった。

春江を殺（あや）めてなお、無銭飲食をしながら名古屋市内にとどまっていたという。 Ⅱ続く（敬称略）

◎上記の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

中日新聞社 二〇一三年一月二四日

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『死を予感 最初の一通』

使ったグラスやテーブルの上をタオルで入念に拭う。衣服は少し乱した。これで暴行目的に見えるだろう。

二〇〇二年三月十四日未明、名古屋・栄の Snackbar 「パティオ」。ママの千葉春江（61）を絞殺した武藤恵喜（ぶとうけいき）は、凶行の後始末を終え、店を出た。

早く遠くへ逃げよう、とは思わず、まずはタクシーで名古屋駅近くへ。サウナに入店し、ひと眠りした。恐らく、この時点で春江を殺（あや）めて得た八千円は半分以上が消えたはずだ。

後始末をうまくやれたと思ひ込んだ恵喜は、その後も、無銭飲食や盗みを繰り返しながら名古屋をうろつく。

実はパティオで飲んだビール瓶に指紋の拭き残しがあり、愛知県警は早々にそ

の名を割り出していた。二日後の十六日夕、名古屋・金山の駅前で恵喜は捜索中の警官に呼び止められる。

このとき五十二歳。うち二十三年十カ月が刑務所暮らし。まだ恵喜は知らなかったが、以降、二度と塀の外を歩くことはなかった。

恵喜の十歳年下で、同じころ、詐欺事件で捕まった沢田竜一（仮名）は逮捕直後の恵喜を最もよく知る男だ。この年の四月半ばから七月まで名古屋・中署の留置場の同じ房ですごした。

沢田はクリスチャン。古ぼけた一冊の聖書を持ち込んでいた。

恵喜はそれに興味を覚え、暇があると耽読した。「牧師ってどういう人がなれるんだい」。沢田にそう尋ねたこともある。

恵喜は後に支援者にこんなエピソードを明かしている。

「愛のない言葉は人の心に届かない」。中学生のころ、家のラジオで聞いた宗教番組のこんな言葉が忘れられない。

事件後、昔の記憶を呼び覚まし、自身の罪を心から反省したのだろうか。

そうでもない。恵喜は沢田に事件のことをこう語っている。「債権回収に行ったら、ママと口論になり、何かの拍子に倒れて気絶した…」。相変わらざるうそ。

ただ、何を思ったか、恵喜は一通の手紙を書く。

五月四日、名古屋市の牧師、戸田裕（80）がその封を開けた。「私は殺人という大罪を犯し、中警察署で取り調べを受けています（中略）死刑に近いところにいます…」

刑死の気配が忍び寄る扉の中で、新たな人々と交わり、揺れ動く心をつづつた九百通余の最初の一通だった。

〓続く（この連載は一月中旬に再開します）（敬称略）

◎上記記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---



【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『殺人者からの手紙』

半世紀前に建てられた赤屋根の礼拝堂は周囲の家々に溶け込んで、あまり目立たない。二〇〇二年五月四日、名古屋市東区の「日本福音ルーテル復活教会」。

礼拝堂わきの小さな執務室で、牧師の戸田裕は郵便受けから取り出したばかりの手紙の封を切った。宛先には教会の名前しか記されていない。「武藤恵喜」。差出人の名にも覚えはない。

B5の便箋二枚、黒のフェルトペンで書かれた中身を読み進めると、すぐに目が留まった。

「私は殺人という大罪を犯し中警察署で取り調べを受けています…」

このとき、戸田は六十八歳。牧師になって四十年近く。二年後には所属教団の定年を迎える。十年近い米国での伝道も含め、これまで、信徒からの数え切れない相談に応じてきたが、殺人者からの手紙は初めてだった。

\*開口一番「神頼みですよ」

牧師の戸田裕が封を切った手紙。後に差出人の武藤恵喜（ぶとうけいき）自身が戸田に明かしたところでは、出したのは「聖書の一冊でも、もらおうかという安易な気持ち」で、戸田の教会を選んだのも「たまたま」だった。

確かにこのころ恵喜は名古屋・中署の留置場で同房だったクリスチャン沢田竜一（仮名）の聖書に興味を覚え、読みふけていた。自分の一冊が欲しかったのかもしれないが、それにしては随分と心中を吐露している。

「逮捕時は何も考えず、たんたんとした日を過ごしていたのですが、気持ちも落ち着き、自分のしたことやこの先を考え始めました（中略）私のような道はずした人間にも、生きていく希望を見い出す事ができるのでしょうか。残された人生の過ごし方、私の犯した罪に対しての考え方などご指導いただければ幸いです」

一カ月半前、名古屋・栄で二人目の犠牲者となるスナックママを殺（あや）め、逮捕された恵喜のことを戸田は知らなかった。「殺人」や「死刑」。戸田が尊さ

を説き続けてきた「命」と表裏の重い言葉が身を駆り立てた。

手紙を読んで一週間足らず。戸田は返信よりも先に中署五階の留置場の面会室へと足を運ぶ。アクリル板の向こうの男はボサボサの髪を肩近くまで垂らしていた。

「困ったときの神頼みですよ」。開口一番、恵喜はぞんざいに言い放った。困ったとき、つまり、都合の良いときだけ助けてほしい、とも取れる。教えを請う相手への一声としては失礼すぎるが、戸田は逆に恵喜と向き合う糸口をつかんだ気がした。

窮地に陥り「神も仏もあるもんか」と捨て鉢になる。そんな人間は大勢見てきたが、目の前の男は違う。どうやら「神頼み」の気力ぐらいはあるらしい。

「良かったですね、あなたには困ったときに頼れる神様がいて」。老牧師と殺人者、二人の間答がこうして始まった。

|| 続く (敬称略)

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『軽さ感じた「命で償う」』

めて「償い」という言葉を使った。

一読、殊勝に思える。だが、戸田はこう感じた。

「軽い…」

恵喜との交流を振り返る牧師の戸田＝名古屋市東区のルーテル復活教会で＝

実は恵喜はこのころ、取り調べでも殊勝な態度を続けていた。

写真

「会話中に腹が立ち、殺してしまった後で金を盗んだ」。逮捕直後はこう主張

梅雨のはしりか、二〇〇二年五月半ばの名古屋は連日、雨に見舞われていた。

した恵喜だが、わずか一週間で簡単に変える。

こんなときはけんしょう炎の両手がひどく痛む。ゆっくりしかワープロをたた

「金を奪うため、殺すしかないと思った」

けないのがもどかしい。

殺した後で金を盗んだのか、金を奪うため殺したのか。結果は同じようでも、

「あなたは独りじゃない」。牧師の戸田裕は面会した数日後、武藤恵喜（ぶと

裁判では大きく意味が異なる。殺人と窃盗なら有期刑もあるが、後者は強盗殺人

うけいき）へ宛て、まずはそんなことをつづった。

となり、法が定めるのは無期懲役か死刑しかない。恵喜が一九八三年、長野県の

五月二十二日、恵喜から返信が届く。

旅館で女将（おかみ）を絞殺した事件で、判決が懲役十五年だったのは前者と認

「何の罪のない人の命を奪った。自分の命をもって償いをするのが、被害者

められたゆえだった。

の家族にとって、それにも増して自分でも一番納得がいくと思う」

罪を正直に認め、償いのため、もう死刑でいいと考えたのだろうか。

その二カ月前、名古屋・栄でスナックのママを殺（あや）めて以来、恵喜は初

戸田の答えは否。ある日の面会でこう尋ねた。

「あなたは償いのために自らの命を差し出すと格好良くいうが、あなたにとって命はそんなに重いのか。だったら、そんな人の命をなぜ簡単に消したんだ」

恵喜は黙り込んだ。

命の重みと本当に向き合っているのか。「反省の情を示して刑を軽くするためか、単にやけになっているだけじゃないのか」。そんな疑念がぬぐえなかった。

五月二十八日、名古屋地裁で迎えた初公判。「殺してやる」。恵喜は被害者の残された「家族」から峻烈（しゅんれつ）な怒りを浴びる。 Ⅱ 続く（敬称略）

◎上記記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『「殺してやる」夫が怒りの拳』

前代未聞だろう。

二〇〇二年五月二十八日、武藤恵喜（ぶとうけいき）の初公判が開かれた名古屋地裁九〇三号法廷で“事件”は起きた。

開廷前、須藤正夫（仮名）は傍聴席の最前列で身じろぎもせず、待っていた。事実婚とはいえ、二十年以上連れ添った二歳下の妻、千葉春江（61）を手にかけた男がじきに現れる。

春江が殺されて二カ月半。幾度も検察に足を運んでは「必ず死刑に」と願っていた。当時、二十九歳だった正夫の長女も血のつながらない「母」への思いをこっそり訴えていた。「私の子も、母さんを見て『ばあば』と呼んでいました。孫の成長を楽しみにしていた母さんの人生をすべて奪った。私たち家族からかけがえのない大切な人を奪った」

それが、いったいどんな男なのか。正夫はずっと考え続けていた。

法廷に、刑務官に挟まれた恵喜が連れられ、目の前の被告人席に座る。髪は伸びっぱなし。背筋を張るでもなく、なで肩が一層、だらんとして見える。

これが？ こんなだらしなく、根性も無さそうな男に？ 春江、なぜ逃げられなかった…。

「間違いありません」。検事が朗読した強盗殺人のあらましを恵喜はすべて認めた。さらに詳しくあの日の一部始終が読み上げられる。「首にマイクコードを二回巻き付け…わいせつ目的と偽装するためスカートの裾をまくり上げ…」

あの朝、現場に駆けつけ、その目で見た光景がよみがえる。雑居ビル、階段、店の入り口、さえぎろうとする警官、床に転がった女房、変わり果てた姿。正夫は混乱した。

「てめえ、ばかやろう、おれが殺してやる」  
叫んだ。左手で拳をつくる。傍聴席の柵から身を乗り出し、一メートル先に座る恵喜の左頬を背後から殴りつけた。騒然とする廷内。審理は中断し、裁判長は

正夫の退廷を命じた。

恵喜にけがが無かったからか、正夫の暴行事件は不起訴とされた。恵喜は後日、牧師の戸田裕への手紙にこう記している。

「私が原因で罪人をつくったのでは、泣いても泣ききれません。ほっとしていません」

正夫はその後も公判に通い、被告人席をにらみ続けた。恵喜が正夫と目を合わせることは一度もなかった。 Ⅱ 続く (敬称略)

◎上記の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『「生きたい」願い強まる』

左腕で首を絞めていた。はつきりとした感触がある。覚えのある感触だ。なのに相手が分からない。いったい、だれを…。

ハッと目が覚めた。目が覚めたはずなのに背後からこんな声がした。「あんたは神様に救われるかもしれないが、殺された私はどうなるんだ」

自らの手で絞殺したスナックママ、千葉春江（61）。その夫に殴られるという前代未聞の名古屋地裁での初公判から二カ月余り。二〇〇二年、うだるような猛暑の八月初め、武藤恵喜（ぶとうけいき）は牧師の戸田裕への手紙で忘れられない一夜の夢を打ち明け、こうつぶつた。

「あの首を絞めた時の感触は、この先どのくらい生きれるかわかりませんが、死ぬまで背負って行く事が被害者への償いと思っています」

恵喜はこのころ、一連の取り調べが終わり、名古屋・中署から名古屋拘置所へ

と移管されていた。長い髪を短く切りそろえ、十階の広さ四畳、独居房での暮らし。独りの時間、何を思い、すごしたか。「死んで償いたい」。戸田との面会や手紙で繰り返した言葉を使わなくなる。

代わりにこんなことを書く。日付は八月十日。「逮捕直後は極刑で楽になりた」という気持ちが強かったが、今は、何とかして生きて出て教会で神に感謝の祈りをささげたい」

やがて夏がすぎ、十月八日、四回目の公判だった。

恵喜は弁護士に相談もせず、法廷で突如、それまでの発言を翻す。「被害者を殺した後に金を奪うことを考えた」。死刑の可能性が高まる強盗殺人ではなく、殺人だという主張だ。逮捕から一週間後には強殺を認めたはずが「夜遅くまでの取り調べが続き、もうどうでもいいと思った」と説明した。

その半面、長野と名古屋、二度の人殺しの手口が酷似している点を検事に問われ、こう答える。「まるつきり同じことをしたということは、またあるのかな」という気持ちを持っていることは確かです」

刑を軽くしようとしながら、再犯の可能性に言い及ぶ。ある意味、支離滅裂。  
ただ、ひとつ確実なことは、この後、恵喜は「生きたい」という願いを強めてい  
く。|| 続く (敬称略)

◎上記の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---



中日新聞社 二〇一四年一月一五日

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『塀の中「先生」と呼ばれて』

名古屋拘置所での武藤恵喜（ぶとうけいき）の一日は午前七時半の朝の点呼で始まる。十階にある四畳の独居房。起床すると入り口に向かって正座し、刑務官の呼び掛けを待つ。

「二百四十番」。二〇〇二年七月、名古屋・中署の留置場から移管されてからそれが恵喜の呼び名だった。ただし、囚人仲間たちは番号ではなく、こう、呼んだ。「先生」。

塀の中では外の世界と人を測る、もの差が違う。

ある日、十階の廊下で三十代ぐらいの暴力団員の男がふと恵喜に話し掛けた。

「おっさん、何やったの」

「殺しだよ」。男はすぐに深々とこうべを垂れた。顔色が少し変わっていた。

このときまで四半世紀近くを塀の中で暮らしてきた恵喜はベテランの罪人だ。

しかも二人を殺（あや）めている。囚人仲間から一目置かれ、恵喜の房には、しばしば悩みごとを相談する手紙まで舞い込んだ。

中署の留置場で同房だった十歳下の沢田竜一（仮名）も恵喜を慕った一人。偶然だが、沢田も恵喜に続き、名古屋拘置所の十階へ移された。気掛かりは当時、小学三年生の長男。「中学の入学式には出たい」。所内で袖すり合うわずかな時間、そんなことも話した。

恵喜はあえて手紙で告げた。「早く仮出所するには、中に知り合いがいては印象が悪くない。話し掛けてはいけない」

四年後、沢田はぎりぎり仮出所し、入学式に出席する。礼を言いたくて、恵喜に三度、面会を申し入れるが、三度断られる。返事はやはり手紙。「親子三人、今の生活を守るには、くどいようだが、過去を忘れて生きることです」。沢田にとって恵喜は「優しい人」だった。

「先生」と慕われ、衣類や本など牧師の戸田裕からの差し入れて身の回りにも不足はない。名古屋拘置所の居心地は決して悪くなかっただろう。

「出所できたならば本を書きたい」。戸田に対し、将来の夢を語り始め、裁判も終幕近くの二〇〇三年一月には「先生」らしく自らの刑も予想した。

「岐阜刑務所に入ると思います。二十年近い務めに入ることには間違いない」

二人を手にかけて男。五月十五日、名古屋地裁での一審判決は―。|| 続く（敬

称略）

◎上記の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『一審無期「生きながらえた」』

二〇〇三年五月十五日、名古屋地裁九階の九〇三号法廷。「助かりたい」。武藤恵喜（ぶとうけいき）は不安におびえていた。「死刑はない」と高をくくっていたはずが、いざ証言台に立つと「万が一…」の恐れがどうしようもなくあふれてくる。

もしも「死刑」ならば大抵、主文は後回しにされるのだが、三人いる裁判官の真ん中、黒い法服を着た裁判長、伊藤新一郎はいきなり宣告する。

「被告人を無期懲役に処する」。

恵喜は後に牧師の戸田裕への手紙で判決直前の不安と直後の安堵（あんど）の気持ちをつづった。「もう少し生きながらえることができそうです」

一年余り前、名古屋・栄のスナックでママ千葉春江（61）を絞殺し、八千円を奪った恵喜。裁判の途中「殺した後で金を奪うことを考えた」といい、いった

んは認めていた金目当ての強盗殺人を否定する。

判決で伊藤は恵喜のそんな態度や、長野での一人目の殺人にも触れ「反省、悔悟の情に乏しい。再犯の可能性を否定しがたい」「極刑も考えられる」と断罪した。ただ、現場にあったカラオケのマイクコードで首を絞めた手口に計画性は認めず、命を奪う「究極の刑罰」に決めるには「疑いが残る」と語った。

伊藤は今、六十六歳。一二年秋、定年を迎え、法服を脱いだ。四十年近くの裁判官生活で死刑の判決文を書いたことは一度もない。伊藤は恵喜の裁判に関して「判決文がすべて」と口を閉ざすが、一般論として言う。「裁判は被告人が社会に戻るための出発点。閻魔（えんま）さまに極楽か地獄行きかどうか印鑑をもらう所ではない。自分で考えてもらう手続きが大事だ」

恵喜への判決の言い渡しは「終生、贖罪（しよくざい）に当たらせることが相当である」と結んで終わる。

殺された春江の事実婚の夫で、初公判のとき、恵喜に殴りかかった須藤正夫（仮名）は、傍聴席で身を震わせた。「こんなもんか…」。恵喜だけでなく、伊藤へ

の怒りで、だった。

弁護士の勧めもあつてか、恵喜は有期刑への減軽を求めて控訴する。どの道、その二日後には検察も。正夫は担当検事の言葉を今も覚えている。「絶対に死刑にしてみせます」 Ⅱ 続く（敬称略）

◎ 上記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

中日新聞社 二〇一四年一月一七日

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『予期せぬ宣告「耐え難い」』

武藤恵喜（ぶとうけいき）はすぐには返答しなかった。検察の死刑求刑に対し、名古屋地裁が下した「無期懲役」。その判決から二カ月がすぎた二〇〇三年七月、名古屋拘置所の面会室で弁護士の太田寛は初めて顔を合わせた恵喜にこう助言した。「強盗殺人の事実関係を争うのはやめましょう」

名古屋高裁での控訴審の開始を控え、新たに国選で付いた弁護士が太田だ。当時、脂の乗った四十五歳。環境問題などの民事を得意としてきたが、仕事の幅を広げようと国選の刑事裁判も進んで引き受けていたころ。初めての死刑求刑事件はキャリアを積む好機とも感じていた。

一審の途中、恵喜は金目当てではなかったと強盗殺人を否認している。しかし、判決はそんな態度を「反省の情に乏しい」と切り捨てた。ならば高裁では反省を示せばいい。太田は有期刑への減軽を狙って、そう戦略を練った。

恵喜にとっては一審での否認がうそだったことになる。しばしためらったが、

間もなく「それでお願ひします」とうなづく。

特段の争点がない控訴審はその秋、わずか二回の公判で結審する。

太田は恵喜が牧師の戸田裕へあて「死んで償いたい」などと記した手紙を法廷に出した。直前には恵喜が須藤正夫（仮名）へ初めての手紙を書く。自ら殺（あや）めたスナックママ、千葉春江の事実婚の夫への一通は贖罪（しょくざい）の心の証しと主張した。

一方、逆転「死刑」を目指す検察は恵喜への憎しみと一審判決への不満という遺族の思いを文書にまとめ、対抗した。正夫は「今でも考えるのは春江のことがり」といい「絶対に死刑に」と求めた。恵喜から届いた手紙は鼻をかんで捨てていた。

そして〇四年二月六日、高裁判決が出る。

「死刑」一。

そのころ世間では「厳罰化」の流れが強まっていたのだが、恵喜も太田も予

想だにしない結果だった。

判決後、法廷を出た恵喜は、廊下で目まいに襲われた。「恐怖と不安の入り交じった、耐え難い気持ちになった」。三日ほどぼうぜんとして過ごし、戸田への手紙にそうしたためた。

「無償でいいから弁護を続けたい」。太田の強い勧めもあり、恵喜は最高裁に上告する。以降、恵喜は刑死の恐怖と不安を感じ続けることになる。そして、意外なことにぬくもりを…。  
|| 続く (敬称略)

◎ 上記の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『家族を裏切り、求める』

二本のろうそくが、十字架と武藤恵喜（ぶとうけいき）の顔をほんのりと照らしている。名古屋拘置所の会議室に即席でしつらえた祭壇の前、恵喜の頭に三度、聖水が浴びせられ、短く刈りそろえた髪から、したたった。

名古屋高裁で死刑を宣告されてから六日後の二〇〇四年二月十二日。恵喜は塀の中の洗礼式で「パウロ」という名を授かる。信徒を迫害する罪を犯しながら、イエスとの出会いで回心した聖人。恵喜が自ら欲した名だった。

恵喜は牧師の戸田裕に洗礼を望んだ理由をこう説明している。「長野での一度目の殺人のとき、全て忘れて生まれ変わろうとしたら、本当に全てを忘れた。こんなどは、忘れないために」。イエスのしもべとして、わが身に罪を刻む、そんな思いがあったらしい。

洗礼の前後から恵喜のもとには、新たに交わりを結ぶ信徒仲間がだんだんと増

えていく。

当時、恵喜と同年、五十三歳の小川健司も週二回は面会に足を運ぶようになり、本の差し入れや、衣類の洗濯まで引き受けた。戸田を「おやじ」と慕ってきた恵喜は、小川を「兄貴」と呼ぶようになる。

だが、そんな小川にも恵喜はうそをつく。「故郷には別れた妻と子どもがいる」。恵喜が結婚したことは無い。「両親はもう死んだ」。父は一九九〇年代半ばに亡くなっているが、母は今も健在だ。

恵喜は「両親から、もう長野に戻って来ると言われて」と話したこともある。長野で旅館の女将（おかみ）を殺（あや）め、岐阜刑務所に服役中のころだとい「家族に不信感をもった」とも。実際には、母はそのころ、獄中の息子へ改心を願う手紙を送り続け、四国を遍路して犠牲者の冥福を祈っていた。

若いときから刑務所暮らしを繰り返して、果ては二度の人殺しまで。更生を信じる家族を裏切り続けた恵喜。それなのに、いや、それだからか。「兄貴」の小川はこう振り返る。「あの人は見返りなく自分のために何かをしてくれる相手を求

めていた。家族へのあこがれがあった」

高裁での死刑判決は、そう大きくはないが全国ニュースになった。ある日、名

古屋拘置所の恵喜に関西から一通の手紙が届く。恵喜の心に深く入り込み、文字

どおり家族となる「加納」という女性からだった。 Ⅱ続く

(敬称略)

◎上記の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---



【二月二十一日 ある死刑囚の記録】返信した、ただ一通

武藤恵喜にとって数十通の手紙の中、その一通だけが「温かかった」という。

名古屋高裁で死刑を宣告された恵喜の元には見知らぬ相手から支援を申し出

る手紙が続々と届くようになっていた。事務的なものや、中には支援してやる、

というふう感じられるものもあったのだろう。キリスト教の信徒仲間で、「兄

貴」と慕った小川健司に後日明かしているのだが、恵喜はほとんどに「反感」を

覚えて読み捨てた。返事をしたためたのは一通のみ。

差出人は「加納真智子（名は仮名）」。女性だろうが、年齢も詳しい経歴も分

からない。「出そうか出すまいか、さんざん迷った」。恵喜への励ましに加え、

文面には書き手の心情がにじんでいた。

間もなく真智子から返信が届き、恵喜は一読して目を見張る。

\*「手紙、本当に嬉しく…」

「人付き合いばかりか、何をするにも人より何倍も日数の要する人間ですから、手紙をいただいた時は本当に嬉（うれ）しく、心からお礼申し上げます」

二人を殺（あや）めた恵喜。真智子はそんな男に向けて丁寧な感謝の言葉を並

べた。恵喜こそ嬉しかったに違いない。「兄貴」小川健司に打ち明けている。「た

った一通出した人が加納さんのような人で驚きです」

真智子は当時、恵喜と同学年にあたる五十四歳。兵庫県に暮らす主婦だった。

仲の良かった友人らによると、津軽平野の真ん中、青森県五所川原市に生まれ

た。リング農家の四姉妹の三女。一度、見合いで結婚したが別れ、地元のホテル

で働いていた四十代半ば、兵庫県から旅行に来た高校の数学教師と出会う。山野

で白く小さな花を付けるヒトリシズカの話をしたのをきっかけに親しくなり、間

もなく夫婦になった。

実家とはもともと折り合いが悪く、再婚で故郷を去ると、もう寄り付くことは

なかった。しかし、新天地での暮らしも思い通りとはいかない。ふだん優しい夫

は心が不安定なところがあったといい、真智子は徐々にすきま風を感じるように

なる。後に友人への手紙に夫への愚痴をつづり、こう続けた。「家庭というものに縁がないのかもしれない」

ちょうど五十の年、真智子はキリスト教の信徒になる。所属する教会で、ハンセン病の元患者や死刑囚の支援にも取り組み始めた。

「人生に課題を持って生きたい」。よくそんなことを周りに言った。

新しい課題のひとつ。恵喜に手紙を出したのも、はじめはそんな気持ちだったのかもしれない。

名古屋高裁での死刑判決から三カ月がすぎた二〇〇四年五月、ひんぱんな手紙のやりとりを経て、二人は名古屋拘置所で初めて顔を合わせた。

家族を裏切り続け、そのきずなを失った男と、理想の家族をつくれなかった女性。どんな言葉を交わしたのか、今となっては手掛かりはない。ただ、面会からわずか二カ月後、二人は養子縁組を結び母子になる。 Ⅱ 続（敬称略）

◎ 上記の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『殺人者支える“母親”』

二〇〇四年五月、ちょうど名古屋拘置所で武藤恵喜（ぶとうけいき）と初めて顔を合わせたころ、恵喜との養子縁組を心に定めた加納真智子（名は仮名）が、ある女性を訪ねている。

大阪市の小さな教会で牧師をしていた当時、六十五歳の向井武子。武子によれば、出会いはあまり印象に残っていない。一五〇センチそこそこの背丈で、奥二重の優しそうな目。一見、もの静かだが、いったん口を開くとよくしゃべる。確か、弾んだ口ぶりで、こんなことも言った。「向井さんのような生き方をしたいわ」

殺人者を家族として支える。武子はその数少ない“先輩”だった。一九八五年、神戸市などで二軒の民家に押し入り、幼子を含む計三人を殺害、〇三年に四十二歳で死刑執行された向井（旧姓前原）伸二。武子はこの男を養子とし、十七

年にわたり、向き合ってきた。

「母さんと一緒に生きていきます」。そんなことを言ったかと思えば、「利用価値がないから離れます」と豹変（ひょうへん）する。「息子」に代わって遺族に頭を下げ、裁判所では見知らぬ人から罵倒された。心身ともに疲れ果て、数カ月、床に伏したこともある。武子が「全身全霊」でぶつかった息子との歩みは本にもなり、真智子も読んでいた。

「のめり込みすぎだ」。たびたび、そんな批判も浴びた武子だが、その実、踏みとどまった一線がある。「償いと向き合わせるといふ宗教者としての目的意識は忘れなかった。それを忘れ、母親の情に流されるだけでは、泥の中にはまってしまう」

幾度目かの来訪で、真智子から養子縁組の証人を頼まれたとき、武子は快諾する。恵喜のことはよく知らなかったが、真智子は同じクリスチャン。恵喜とどう向き合っていくのか、さほど心配はしなかった。

〇四年七月、恵喜の母となった後も真智子は足しげく武子のもとへ通い続ける。

ある日、思い詰めたように武子に耳打ちした。「恵喜さん、わたし以外にも女性と文通してゐるみたい」

まだ、漠然とはあったが、武子は二人の関係に少し「危うさ」を感じた。||

続く（敬称略）

◎上記事の著作権は「中日新聞」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】縮めた距離、面会重ね (19)

恵喜は「心配かけてごめん」と謝った。

友人たちは情に流されていると、たしなめたが、〇五年十二月、真智子については名古屋へと引越す。拘置所から一キロちよつとのマンション。新幹線を使っても二時間ほどかかった二人の距離は自転車で数分に縮まった。

恵喜の母となった二〇〇四年の夏から半年はすぎていた。加納真智子（名前は仮名）は夫との仲がこじれ、新大阪駅からひと駅のワンルームマンションで独り暮らしを始める。

近所の女友だちが廊下の窓から顔をのぞかせ、玄関をうかがう真智子を目にしたことがある。

「何してるの」

「郵便屋さんを待ってるの」。真智子は毎日のように恵喜から届く手紙を心待ちにしていた。

ただ、牧師の向井武子や友人に悩みを吐露するようになったのもこのころ。「恵喜さん、わたし以外にも女性と文通してるみたい」。思い余った真智子は面会で

涙ながらに迫ったという。「最後まで面倒を見てくれるのは誰だと思うの」

面会は連日に。恵喜の衣類を洗濯し、恵喜の好んだ甘い菓子を差し入れた。貯金を取り崩しながらの暮らしは無論、楽ではない。友人への手紙に記している。名古屋で初めて迎えた春。恵喜用のついでに自分のためのTシャツも「買った」。四つ葉のクローバーをあしらった千円のやつ。「たまに新品のは気分いいです」

真智子は自らを「弱い」と公言していた。そして恵喜も「弱い」のだと。「狭い独房の中では生きていることの方がつらいかもしれない。そのつらさも償いのうちに入ると思う」といい、恵喜のために願った。「弱い者同士、寄り添いつつ共に生きていきたい」

が、それもむなしく〇七年一月、真智子は名古屋での暮らしを一年ほどで終え、

大阪へ戻ることになる。体調を崩し、検査入院した名古屋の病院で告げられた。

「がん」。既に乳房から肝臓に転移しており、完治は難しかった。

真智子は大阪へ転院する一週間前の面会まで恵喜に黙っていた。「もう来られ

ないから、誰かいい人がいたら、その人と縁組して」

「それをしたら、武士の一分が立ち申さん」。冗談めかした恵喜の返事に真智

子は泣きながら笑った。（敬称略）

◎上記記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『逃げちゃだめ、生きて』

中日新聞 2014年1月29日

加納真智子（名は仮名）は二〇〇七年一月、名古屋を去り、大阪市内のマンションに落ち着く。「夏まで持てば…」。通院先の医師にそう告げられた。抗がん剤治療のため髪の毛が抜け、顔はむくんでいく。一日中、床に伏すことも増えたが、恵喜（けいき）への連日の手紙や、週に一度の面会はやめようとしなかった。苦しみながらも生き続ける。それが恵喜の償いと信じる真智子は自らの病を知ってなお、恵喜を案じていた。

最高裁での上告審が続く中、真智子には恵喜が「死刑」に逃げようとしているように思えたからだ。

大阪に戻ってしばらく、真智子はこんな手紙を出している。「先にとらわれず、今生きていられることに感謝して、すごしていこうねって話し合っています」

宛先は東京の弁護士、湯山孝弘。四十九歳と真智子より七つ若い、恵喜が生

きていくことを願う“同志”だった。

さかのぼること二年半。名古屋高裁での死刑判決から半年がすぎた〇四年八月、体を壊した前任の太田寛に代わり、上告審での恵喜の国選弁護を引き受けたのが湯山だ。

「ふつうのおじさんだなあ」。名古屋拘置所の面会室で初めて恵喜と会った湯山はそんな印象を覚えたという。

ノートパソコンを開き、恵喜の話を打ち込んでいく。「償いが一番つらいし、生きていくのがつらい…」。二人を殺（あや）めた「おじさん」は随分と投げやりに見えた。

確かによほどの新証拠でも出ない限り、上告審で高裁の死刑判決が覆ることはほとんどない。あきらめ、だろうか。面会を重ねるに連れ、恵喜はしばしば「もう死刑でいい。上告を取り下げたい」と口にするようになる。

そのたび「そんなのやめて」と懇願したのが真智子。湯山も叱った。「反省が足らん。生きて償いましょうよ」

もちろん、湯山とて、この上告審が厳しい闘いであることは重々承知していた。だが、負けたくない。

三千ページを超える裁判資料。弁護が決まってから毎夜、日付が変わるまで読み込んだ。

信じられなかった。「なんでこれで死刑なのか」 Ⅱ続く

(敬称略)

◎上記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---



【二月二十一日 ある死刑囚の記録】 『やむを得ないのか…』



ところどころに付箋が貼られた恵喜の裁判記録。湯山は深夜まで読み込んだ（一部画像処理）

「変な弁護士だなあ」。二〇〇四年八月、加納恵喜（けいき）は初めて面会した湯山孝弘を値踏みしかねていた。恵喜が後に湯山本人に明かしている。

カネにはならず、勝ち目もありそうにない最高裁での国選弁護を引き受けた東京のセンセイ。髭面（ひげづら）で、丁寧とはいえない口ぶりでこんなことを言う。「弁護士じゃなくて、俺という人間とちよつと話そうや」  
やがて恵喜は面会に立ち会う刑務官にこの「変な弁護士」を「友だち」と紹介するようになる。

二十代のころ、友人の劇団に参加していた湯山は主役に照明を当てるピンスポットがうまかったそうだ。三十歳で弁護士になると、花形の企業法務で辣腕（らつわん）をふるい、三年で独立、若手弁護士二人を従えて、都心に事務所を構えた。

ITバブルの寵児（ちようじ）と評された企業の顧問も務めたが、カネのためのいざこぎに奔走する日々疲れ、ふと気付く。「別にひとりでもいい。自分の好きなことをやっていこう」。ライトは浴びるより当てる方が性に合う。

そんな湯山が恵喜の裁判記録に目を凝らして感じたのは名古屋高裁での死刑判決の不可解さだった。

死刑が求刑された事件で裁判官が必ず参考にする「基準」がある。十九歳の永山則夫が四人を射殺した事件で、一九八三年に最高裁が示した「永山基準」。殺害の手口は残忍か、前科はあるか、被害者は何人か、遺族の感情はどうか、など九つの要素をにらみ「やむを得ない」場合だけ、死刑を選べる、とされた。

別段、何人殺せば死刑、といったふうに明瞭な線引きができたわけではないが、この後、死刑の選択にあたり、量刑の相場が形づくられていく。

湯山が恵喜の弁護人となって間もない〇四年十月、日弁連が永山基準が示されて以降の判例を研究した報告書をまとめている。例えば、犠牲者が一人の殺人事件。誘拐や保険金目当てなど計画性が高いか、以前に無期懲役刑で服役し、仮釈放中に起こした場合をのぞき、死刑を宣告された事例は皆無だった。

もともと、調査期間は〇三年まで。〇四年二月、初めての例外が起きていた。恵喜のケースだった。

〓続く

(敬称略)

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】生死を分かっ「厳罰化」

恵喜（けいき）に死刑を宣告した二〇〇四年二月の名古屋高裁判決だが、無期

懲役だった名古屋地裁と比べ、判断の根拠がさほど異なっているわけではない。

名古屋のスナックママを殺（あや）めた恵喜。身勝手に、残忍で、遺族の感情

は悲痛極まりない。どちらの判決も似通ったことを言っている。半面、ママに

すぎがなく、もう逃げられないと追い詰められたゆえの凶行であり、事前の計画

性は無い、としたところも同じ。

地裁ではこれが刑を減じる要因となったが、高裁判決は「しかし…」と続く。

一九八三年にも長野で旅館の女将（おかみ）を手にかけて、刑務所を出た後も無銭

飲食などを繰り返した懲りない男。追い詰められたのは「自業自得」だとし、死

刑を回避する事情には当たらないと断罪した。

死刑選択の「永山基準」が八三年に示されて以降、一人を殺したケースでは計

画性がないなら死刑も無いのが相場だった。例外は無期懲役の前科があり、仮釈

放中にまた起こした場合だけ。恵喜が長野の事件で処せられたのは懲役十五年、

つまり有期刑だが、高裁判決は「改善の兆しがみられない」ことを重んじ、その

点もくみ取らなかった。

当時の高裁の裁判長で、〇六年に退官した小出・一（じゅんいち）は今も「個

別の事件については話さない」と口をつぐむが、弁護士の湯山孝弘には「事実関

係の争いではなく、裁判官の評価が変わった判決」と思える。

無期から死刑。刑の重さでは一段上がるだけだが、その間には生死を分かっ最

後の一線が横たわる。湯山には納得できなかった。「はざまにあるのなら、死刑

にしちゃいけない」

ただ、そんな湯山をよそにそのころ、重罪に手を染めた者の厳罰化が世のすう

勢だった。一連のオウム真理教事件が契機とされるが、治安への不安が広がり、

時の首相、小泉純一郎が「世界一、安全な国」を掲げ、犯罪対策の強化や司法改

革を訴えたのが〇三年。

恵喜を含め、〇四年は全国の裁判所で永山基準が出てから最多の四十二人に死刑が宣告された。内閣府の世論調査で死刑存続を求める意見が初めて八割を超えたのもこの年だ。

何しろ、湯山は身近でこんな声も耳にした。「死刑はあつた方がいい。俺みたいな極悪人は社会から排除するべきだ」。恵喜がそう言った。|| 続く(敬称略)

◎上記事の著作権は「中日新聞」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】 『俺の「ボタン」遺族に』

弁護士の湯山孝弘は、会話を盛り上げる手がかりにでもなれば、というつもりだった。記憶は定かでないが、二〇〇四年の秋から冬にかけて。持論の死刑廃止論を話題に振った湯山に対し、加納恵喜（けいき）の反応は意外なものだった。

「死刑はあった方がいい」

名古屋高裁での死刑判決を覆すべく、上告審の準備をしていた最中である。審理では死刑とは人権の根幹を成す命を奪うものであり、憲法違反だとも主張するつもりだった。このころ、しばしば「もう死刑でいい」と言い、湯山や養子縁組した母、真智子（仮名）に叱られていた恵喜だが、制度自体に賛成とは…。

以来、面会や手紙で二人の死刑談議は続くが、湯山がいくら廃止論をぶつても恵喜はうなずかない。まず、死刑に代わり得る刑罰がないという。仮釈放のない終身刑はどうかと水を向けても「希望のない生活を続けていくのは耐えられない」。

成人後の人生の大半を塙の中ですごしてきた恵喜ならではの意見ではある。そして、こうも口にした。「加害者は一日も早く忘れたいが、遺族は一生忘れられない。俺の死刑のボタンは遺族に押させてやってくれ」。つまり、遺族の無念を晴らすためには死刑も必要というわけだ。

「ボタン」は極端にしろ、世が厳罰化に流れる中、遺族感情への配慮を求める声は根強い。〇〇年には一連の司法改革で、遺族が裁判を優先して傍聴し、法廷で意見を述べることも可能になった。恵喜と同じ死刑賛成派が初めて八割を超えた〇四年の内閣府の世論調査では賛成派の半数が「廃止したら家族の気持ちが悪まらない」ことを理由に挙げている。

理不尽に身内を殺された遺族の怒りがどれほどのものか。恵喜は〇二年五月、名古屋地裁での初公判で、自らが殺（あや）めたスナックママの事実婚の夫に殴られたことがある。それに彼らのこともよく知っていた。

一九九四年に愛知、岐阜、大阪で計四人を殺害する連続リンチ事件を起こした当時十八、十九歳の元少年三人。〇四年、二十代後半となり、名古屋高裁で審理

中だった元少年たちは、恵喜と同じ名古屋拘置所に入っていた。恵喜によると、うち一人とは手紙のやりとりがあったという。その彼らもまた、遺族の峻烈な怒りを浴び続けていた。 Ⅱ 続く (敬称略)

◎上記の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】 『命とつり合う罰は命』

事件はひどいものだった。加納恵喜（けいき）が気に掛けていた同じ名古屋拘置所ですごく三人の元少年。一九九四年に愛知、岐阜、大阪でカネ目当てや、ちよつとしたいさかいから四人もの命を容赦なく奪った。

犠牲者の一人、十九歳だった江崎正史（まさふみ）はボウリング場で偶然、目が合ったぐらいのことで、一緒にいた友人とともに金属パイプでめった打ちにされ、岐阜の長良川河川敷に捨てられた。

二〇〇五年三月、名古屋高裁での三人の控訴審。遺族のための意見陳述の場で、正史の父、恭平（69）が口を開く。裁判官に思いが伝わるよう、ゆっくりと、はつきりと。「わたしは貴様らが出てくることを望んでいない」

七カ月後の判決は三人とも死刑だった。〇一年七月、一番の名古屋地裁で、うち二人が無期懲役とされていた無念をこんどは感じずに済んだ。三人は上告した

が一年、死刑が確定する。

恭平のもとには逮捕後、三人から両手に余る謝罪の手紙が送られていた。「きれいごと」としか思えぬそれに目を通してきたのは、法廷での「うそ」を暴く手掛かりでもあればと期待したからこそ。死刑と定まった後に来た一通は封筒に赤字で「拒否」と書き、突き返した。妻のテルミ（68）が言う。「もう必要ない。あとは刑が執行されるのが一番の償いなんです」

恭平は思う。正史が生きていたら家族を持ち、家中を孫が走り回っていたかもしれない。「目には目を、という感情を持って当たり前」。奪われた命とつり合う罰は命を奪う死刑以外に無い。遺族にとってそれは「希望」だという。

制度を是とし「もう死刑でいい」という恵喜。養子縁組した母、真智子（仮名）は「生きて償ってほしい」と願ってきたが、一方で悩んでもいた。弁護士の湯山孝弘への手紙に書いている。「死刑廃止の願いは遺族のことを考えたうえで始まる」。やがて病に倒れたこともあり、実現こそしなかったが、真智子は恵喜が殺（あや）めたスナックママの遺族に直接会って謝りたいと相談もしていた。

○六年七月、そんな真智子は名古屋拘置所の面会待合室でたまたま一人の男性と出会う。原田正治。ある事件で弟を殺された遺族だった。 Ⅱ 続く (敬称略)

◎上記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---



【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『死へ進み始めた2人』

加納恵喜（けいき）の最高裁での上告審。弁護士湯山孝弘は、上告趣意書や補充書と呼ばれる文書と弁論で、名古屋高裁での死刑判決の理不尽さをできる限り丁寧に主張した。

恵喜が殺（あや）めたのは名古屋のスナックママ一人で、計画性も無い。前科である長野での殺人は有期刑で服役を終えている。こうしたケースの死刑は過去に無く、判例違反ではないか。金目当てと認めたこともあったが本心ではなかった。キリスト教の洗礼を受けて反省もしている…。それと、湯山が信念とする、ある人の言葉も付け加えた。

恵喜と出会う四年前の二〇〇〇年十月、湯山は日弁連が派遣した調査団の一員として、一九八一年に死刑を廃止したフランスを訪れた。リュクサンブール宮殿にある議会上院の控室。廃止の旗振り役だった元法相ロベール・バダンテールが

言った。「人間は変わりうるものだ。死刑はその可能性を奪う」

上告趣意書の二十六ページ目、湯山は「この言葉を信じたい」と書き、最後を締めくくった。

上告から三年がすぎた〇七年三月二十二日、最高裁の結論が出る。「棄却」。高裁での死刑判決を認めるということだ。

恵喜が知ったのは翌日の二十三日だったという。覚悟していたのか、高裁判決のときは「目まいがした」という恵喜にあわてた様子は見られない。湯山への速達で心境を明かしている。「結果は武藤（ぶとう）恵喜の終止符であって、残された時をどのように過ごすかは加納恵喜にかかってくると思っています。まるで未知の世界に入り込むわけですが、意外と動揺はありません」。恵喜の日記の二十三日の欄には青いボールペンで「死刑」とだけ記されている。

武藤から加納へ。恵喜は養子縁組した母、真智子（仮名）と知り合い、変わった、あるいは変わろうとしたのかもしれない。少なくとも湯山にはそう思える。

真智子が名古屋から越した大阪市内のマンション。部屋のベランダから赤いポ

ストが見える。恵喜につながる箱だ。友人に「近くてうれしい」と喜んでみせた。一方で上告棄却の直後、湯山宛ての手紙でこんなことを言っている。「二人して死へのカウントダウンが始まりました」。真智子の病は日増しに重くなっていた。

|| 続く

(敬称略)

◎上記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『失う痛み初めて知る』

養子縁組した息子、加納恵喜（けいき）が最高裁で上告棄却され、死刑囚となつてから一年。真智子（仮名）は二〇〇八年の春を迎えていた。医師から前年の夏ごろまでと告げられていた余命をどうにか、つないできたが、がん細胞は骨まで転移し、もう歩くのも、つらい。

四月のある日、連絡がつかないのを心配した友人が警察に頼み、真智子の部屋のドアを開けると、ベッドで意識を失っていた。

連日だった手紙が途絶え、恵喜も異変を察する。だが、塀の中では何もできない。案ずる思いを手紙に込めた。笑わせたかったのか、ちょっと冗談っぽく。「気持ちちは真智子（原文は実名）さんのところへ日参しています。テレビシーを感じるでしょ」。日付は五月一日。真智子が読むことはなかった。

その日午後七時九分。通っていた教会の牧師らに見守られ、真智子は入院先の

病院で息を引き取った。

恵喜と真智子は同級生に当たるが、生まれ月の違いで年齢が重なるのは三〜五月の春の間だけ。生前の真智子はそのひとときを「同じ年だね」と無邪気に喜んでいたという。ともに五十八歳の春。この先、真智子が年を刻むことはない。

「ちょっと早すぎるよ…」。その死を知った夜、恵喜は名古屋拘置所の房の中、頭から布団をかぶって泣き続けたという。訃報を送ってくれた真智子の友人への返信にこうある。

「愛する者を亡くした人の心の辛（つら）さを初めて知りました。（自分が殺した被害者の）遺族に対して心のどこかに『俺が命を持って償いをするから、それでいい』という気持ちがありました。私の思い上がりでした。真智子さんは身をもって教えてくれました」

もう死刑でいい。遺族にボタンを押させろ…。投げやりにも見える恵喜の態度を、真智子は「生きて償うことから逃げている」と叱ってきた。

「恵喜さんへ…」。死の数日前、ペンも持てなくなった真智子の最後の一通を

代筆した病院関係者が覚えている。「大福でも何でも好きなものを食べて、私の分も元気で生きてね」

小さな葬式。恵喜に代わって参列した支援者の一人が後日の面会で、ケータイで撮った遺影を見せた。刑死を待つ恵喜に、その柔らかなまなざしが注がれることはもうない。 Ⅱ 続く（この連載は二月十一日に再開予定です）（敬称略）

◎上記の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】 『面会室のむうちゃん』

「むーすーんで、ひーらーいて」。ふっくらしたほっぺを上下させ、あどけない声を張り上げる一歳半の女の子。小さなこぶしをグーしてパー。振り付けだつて決まっている。

まことにほほ笑ましい。無表情を良しとする立ち会いの刑務官が思わず顔をほころばせたのも、やむを得ないだろう。

二〇〇八年秋のある日、名古屋拘置所の東館二階に並ぶ面会室のひとつ。女の子の伸ばした手の先、アクリル板の向こうでは死刑囚、加納恵喜が、じつと耳を澄ませていた。

女の子は愛称を「むうちゃん」という。

恵喜が“母”真智子を亡くして半年余り。肉親とのきずなはとうに断たれている。このころ、五十八歳。家族のいない恵喜はむうちゃんを「孫」と呼び、面会

を心待ちにするようになっていた。

恵喜は二〇〇八年春に真智子を失った後、支援者への手紙で心の内を明かしている。「この先どうなるかと死にたい、死にたいと思っていたんですよ」

独りぼっちで、ただ死を待ち続ける。真智子には想像できたのだろう。「恵喜さんのこと、お願いします」。生前、自分の亡き後を託した夫婦がいる。

市原信太郎とその妻、誉子（しょうこ）。夫妻が恵喜と知り合ったのは真智子と同じころ。〇四年二月の名古屋高裁での死刑判決の前後、恵喜の支援者だった友人を通じ、面会や、手紙のやりとりを始める。三十九歳の信太郎は、名古屋のミッション系短大の学校付き牧師。一歳下の誉子はふつうの主婦だった。

誉子ははじめ、真智子のことを「大丈夫かな」と不安に思っていたという。たまにボランティアで路上生活者を手助けしていた誉子は支援に熱心すぎると得てして、冷めるのも早いことを見知っていたからだ。だが、真智子は違った。今でも感心する。「加納さんへの献身は最後までとてつもなく大きなものでした」。

病魔に侵された真智子が名古屋を去ると、洗濯や衣類の差し入れ役を快く引き継

いだ。

最高裁で上告が棄却され、恵喜の死刑が確定して十日ほど。○七年四月、夫妻は初めての子を授かる。「むうちちゃん」である。

出産から二カ月後、誉子は初めてむうちちゃんを手に抱き、恵喜と面会した。命の尊さを感じてほしい、なんて大層な願いがあったわけではない。「ただ、加納（恵喜）さんが出産を楽しみにしてたし、預けるところも無かったから」

はじめのころ、むうちちゃんはアクリル板の手前にある幅三十センチのカウンターですやすやと眠っていた。

一歳になってすぐに真智子が亡くなる。むうちちゃんは手をつき、立てるようになっていた。面会のペースは週一回から二回へ。誉子は「けいきおじさんだよ」と教えてきたが、むうちちゃんは口が回らない。人生で二人を殺めた死刑囚は「けいちゃん」と呼ばれるようになった。

むうちちゃんが「むすんでひらいて」を披露したあの日、けいちゃんが、市原夫妻に手紙をしたためている。むうちちゃんから「夢や喜び、癒やしをもらいまし

た」と。 〓 続く (敬称略)

\*前回まで(1〜27)

人生で二人目、名古屋のスナックママを殺(あや)め、名古屋高裁で「死刑」を宣告された武藤恵喜(ぶとうけいき)は、一通の手紙をきっかけに関西の主婦、加納真智子(名は仮名)と養子縁組する。高裁判決は過去の判例に照らして異例と言える厳しいもの。厳罰化の流れの中、恵喜は「死刑は必要」「もう死刑でいい」と投げやりにもみえる態度を繰り返すのだった。「生きて償ってほしい」と願う真智子は一時、名古屋に引っ越してまで恵喜を支えるが、やがて、がんを発症してしまう。

二〇〇七年三月、最高裁で上告が棄却され、間もなく恵喜の死刑が確定。それから一年余りで最後まで恵喜を案じながら真智子が逝く。大切な人を失う痛みを知った恵喜は刑死を待つ日々をどう生きていくのか。

◎上記の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】 やることがない

あちらをそろえれば、こちらがそろわず。六面立体のパズル、ルービックキューブを完成させるのは大変だ。二〇〇八年秋ごろ。加納恵喜（けいき）は名古屋拘置所内で届けを出して買った、このパズルに熱中していた。

養子縁組した母、真智子（仮名）がその年五月に病で逝った後、恵喜の支えになっていた市原信太郎一家への手紙につづっている。冷たいコンクリートの壁に背を預け、長いときは四時間ほど、ぶっ続けてカチャカチャ。六面そろったら一家の一人娘、むうちちゃんへプレゼントしたいという。手と頭を存分にひねっても「難しい」が、それがいい。退屈が紛れる。恵喜は自身を「暇人」といい、パズルのほか「やることが無い」と愚痴った。

名古屋拘置所では死刑囚になると他の囚人と区別するため、下二桁「〇〇」の新しい呼称番号を付け、西館の七〜九階に收容するのが決まりだ。

〇七年四月、死刑が確定した恵喜は「一三〇〇」と呼ばれ、五年過ごした西館十階から九階へと独居房を替わっていた。

午前七時に起床、午後九時に就寝。三度の食事と週に二、三回の風呂や運動以外はすべて自由時間だし、土日は房の中でテレビも見られる。パズルをしたり、差し入れの本を読んだり、日々の暮らしは案外、快適そうだ。

ただ、死刑囚になると、面会や手紙のやりとりが親族や「心情の安定に資する」と認められた五人ほどに制限される。その一人で連日、手紙をくれた真智子はもういない。文通に割く時間が減り、一日が長い。

もともと恵喜は手紙やはがきに絵を添えることがよくあったのだが、真智子に代わり、支援者の市原一家が一番の文通相手になってから、そのタッチが変わっていく。白黒の写実的な鉛筆画から、蛍光ペンを使い、カラフルなイラスト風に一歳をすぎた、むうちちゃんの気を引きたかったのだろう。アンパンマンやキティちゃんも描けるようになった。

新しい絵柄の会得もいい暇つぶしになったに違いない。だが、恵喜も分かって

いた。市原一家への手紙にこんなことを書いている。「四六時中、部屋に座っていますと、大声でさげびたくなる事があります」。それは退屈のせいではなかった。|| 続く (敬称略)

◎上記の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---



【二月二十一日 ある死刑囚の記録】 『5ミリ先が遠すぎる』



(写真) 名古屋拘置所の個室運動場。死刑囚は他の囚人から隔離され、運動

も一人で行う。名古屋市中東区で

名古屋拘置所の四畳ほどの面会室は中央の亚克力板で二つに隔てられてい

る。厚さは五ミリぐらい。そう大きなものではない。

二〇〇八年十二月二十四日のクリスマスイブ。加納恵喜(けいき)は交流する

市原信太郎一家へ出した手紙で、少し前の面会のことを振り返っている。

信太郎に手を引かれてきた一人娘のむうちゃんはそのころ一歳八カ月。立った

り、座ったり、せわしなく、キャツキャツとよく笑う。

十五分の面会時間の締めくくり。恵喜が亚克力板に手のひらをくつつけた。

むうちゃんもあちらからペタリ。板を挟んでの“握手”。むうちゃんは「けっけ、

けっけ」と恵喜の名を呼んだという。

恵喜はうれしかっただろう。そして、たぶん、寂しくもあった。

その年五月に亡くなった養子縁組した母、真智子(仮名)が死の一カ月前、恵

喜に手紙で自慢したことがある。「私、むうちゃんを抱っこしたよ」と。冗談め

かして「参りました」と返信したが、後日、市原一家に明かす。恵喜は少し「嫉

妬」していた。

手に触れたい。「たかい、たかい」をしたい。そう願っても、死刑囚には、た

った五ミリが遠すぎる。

〇八年秋、死刑廃止を訴える市民団体が全国の死刑囚を対象にアンケートを行

い、恵喜も答えている。「死刑囚としての処遇は、何も不自由のない生活を送っ

ています」。ただし、獄中で最も苦しいのは何かとの問いには、こう回答した。

「一人の孤独感」

真智子を失い、初めてのクリスマス。毎年、真智子はメロディー付きのカードを送ってくれた。房の外まで響く「でかい音」に慌てたこともあったが、そんな心配も、もういらぬ。

大みそか。昼間に配られた年越しのカップそばをすすった後、恵喜はすぐに眠ろうとした。除夜の鐘を聞きたくない。これも市原一家への手紙に記しているが、鐘の音は寂しさとむなしさ、そして後悔を呼び覚ますのだという。午後七時には布団にもぐり込んだが「いろんなことが思い出されて眠れなくなりました」。

恵喜は独り、震えていた。塀の中にいる限り、決して拭えない孤独に。それと、迫り来る死の影にも。 Ⅱ 続く (敬称略)

◎ 上記の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

中日新聞社 二〇一四年二月一四日

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】(31) コンベヤーが迫る

加納恵喜(けいき)の日記によると、二〇〇八年十一月五日のことだ。

ふだん通りに朝食を取り、午前中の運動の時間を待つ緩慢なひととき。数人と思(おぼ)しき足音が恵喜の房の前で止まる。フロア担当のなじみの刑務官はいない。ついに来たか。「執行ですか。少し、部屋を片付けるので待ってください」だが、違った。死刑囚に対する「捜検」だという。畳までひっくり返す房内の抜き打ち検査のことをそう呼ぶ。以前からあったが、名古屋拘置所ではその秋、なぜか、月一から週一へと回数が増えていた。従来なら、まだ先のはずだったから、早とちりもする。

「心臓にも悪いし、頭もへんてこになります。(中略)いじめのようなものです」。交流する市原信太郎一家への手紙で、恵喜は珍しく怒りをあらわにした。

刑事訴訟法では、死刑の確定後、半年以内の執行が定められているが、そのこ

ろで七、八年かかるのがふつうだった。恵喜の死刑確定は〇七年四月。はた目にはまだ、余裕があったが、恵喜の心境は違っていた。

〇八年九月の市原一家への手紙にこうある。「私の思っているより(死刑囚の執行が)早く進んでいますから、私もそれほど遠いとは思っていません」

無理もない。〇八年に死刑が執行されたのは十五人と、それまでの三十年で最多を数えた。

うち十人の執行命令に法相としてサインしたのが、鳩山邦夫。〇七年九月、「死刑を自動的に執行できる方法はないか」という、いわゆる「ベルトコンベヤー発言」で物議を醸した。鳩山は「(執行時期を定めた)法律が守られていないのは正義に反すると言いたかった」と当時を振り返り、「今でも正しいと思っている」と断言する。

「もう死刑でいい」と言い放ってきた恵喜だが、〇八年春に鳩山へ苦情を申し立てている。支援者への手紙に記しているが、死刑囚が執行後に臓器を提供できる制度づくりなどを求めた。「救ってあげられる人がいたら、自分の贖罪(しよ

くざい)にもなる」。ただコンベヤーに載せられ、流れ作業のように死を迎えた  
くはない。そんな思いが大臣に届いたかどうか。鳩山は恵喜の名に「覚えはな  
い」という。|| 続く (敬称略)

◎上記の著作権は「中日新聞」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】 「人は変われますよね」

養子縁組した母、真智子（仮名）が亡くなって一年になろうかという二〇〇九年四月半ば。加納恵喜（けいき）はその日もとりとめのないことを、しゃべり続けていた。名古屋拘置所の西館にある六畳の和室。そこにアクリル板はない。古い聖書が置かれた座卓の向かいで教誨（きょうかい）師の野村潔がはい、はいと聞き入っていた。

教誨師とは囚人たちの心を安んじるボランティアの宗教者のこと。野村はキリスト教の牧師として、一九九五年から名古屋拘置所でその役を務めてきたベテラシだ。当時、恵喜より二つ下の五十七歳。恵喜を担当して丸六年近くになる。月一回、四十分ほどではあるが、塀の外の人間でただ一人、じかに向き合える野村との個人教誨を恵喜は「楽しみ」にしていた。

野村は教誨相手との会話を口外しないが、恵喜が支援者へ送った手紙によると、

その日、こんなことを話したという。「どんな性悪でも、出会う人によって人間は変われますよね」。野村は目尻を下げて、うなずいた。「はい」

野村には忘れられない死刑囚がいる。八九年二月、岐阜市で前妻の両親と妹の三人を手にかけて宮脇喬。〇〇年、五十七歳で刑を執行されるまで五年間、教誨を受け持ったのが野村だ。

死刑囚に労役はないが、封筒づくりの作業を願い出て、わずかなカネを災害の被災者らに寄付する。罪を忘れないため、真冬でも靴下をはかず、足はひび割れのまま。恵喜と同じく、獄中でキリスト教の洗礼を授かり、周囲に「生まれ変わって、真っ先に教会に行く」と繰り返したという。野村には、そんな宮脇が「死を望んでいる」と見えた。

野村は神ならぬ人が命を奪う死刑制度には反対だ。だが、心を安んじ、贖罪（しよくざい）の思いが育てば、進んで刑死を受け入れてしまう。「自分のすることが、彼らの死を早めてはいないか」。野村にはそんな不安がある。

「はい」と「良かったですね」「そうですか」。祈りの言葉を除き、恵喜との

教誨で野村が発したのは大抵、その三語だけだという。獄中の孤独を発散する恵喜のしゃべりに水を差したくなかったし、その方が心の内がよく見える。

恵喜は変わったのか。野村はやはり多くを語らないが、ひと言ぽつり。「いい

人たちに出会えて良かったんじゃないでしょうか」

恵喜は生きたいと願っていた。 Ⅱ 続く（敬称略）

◎上記事の著作権は「中日新聞」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『もう少し…生きたい』

加納恵喜（けいき）は甘党だ。どちらかといえば大福など和菓子派だが、その日はアーモンド入りのチョコレートを味わいながら口に運んだ。

二〇〇九年二月十四日のバレンタインデー。交流する市原誉子（しょうこ）と一人娘のむうちゃんが四日前の面会の際にくれたものを我慢して取っておいた。お礼の手紙では味はさておき、こんなことをつづっている。「むうちゃんもそのうち本命チョコをあげる人ができるのかと思いましたら“そこでストッブ！”もう大きくならんでも良いっ！です」

その年四月、むうちゃんは二歳に。恵喜は養子縁組した母、真智子（仮名）が生前に差し入れてくれたお金で「靴を買って」と誉子に頼む。誉子を選んだのは九百八十円のサンダル。面会でそれを履く、むうちゃんにまた目を細めた。

間もなく、恵喜は市原一家への手紙でこんなことを言う。「もう疲れた、早く

真智子（原文は実名）さんのところに行きたいという気持ちと、むうちゃんの成長をもう少し見ていたいという気持ちがいっつもケンカしています」

「死刑でいい」と言い続けた恵喜が揺れ始めていた。

折しも、その夏、日本が揺れる。

政治不信が高まる中、七月下旬、時の自民党、麻生太郎政権は衆院の解散、総選挙に追い込まれた。

自民、民主二大政党の激突となった選挙。重要争点とは言い難かったが、民主党は政策集で「終身刑を検討する」とうたい、死刑制度に関して「当面の執行停止や死刑の告知、執行方法なども含めて幅広く議論を継続する」と主張した。八月末の投票日。その民主党が圧勝し、歴史的と称された政権交代が実現する。

恵喜は、うれしい出来事があると、日記に赤字で書き、さらに四角い枠で囲むのがくせだ。九月十六日の欄にはひととき大きく、ぎざぎざの波線で囲んで、こう記されている。

「鳩山内閣誕生」。翌日には少し小さく「千葉法相」とも。

第九十三代鳩山由紀夫首相の内閣で、法相に就任したのは「死刑廃止を推進する議員連盟」の一員でもあった千葉景子だった。      || 続く      (敬称略)

◎上記記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---



【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『感謝していいのか』

在任中の死刑執行はない。世間はもとより、恐らく、加納恵喜（けいき）もそう思ったことだろう。二〇〇九年九月、民主党、鳩山由紀夫内閣で法相に就任した千葉景子。人権派の弁護士で「死刑制度を無くしたい」と公言していた千葉だが、実は大臣の職責として「サインも避けられない」と考えていた。

それでも引き受けた理由のひとつは、死刑をめぐる情報公開を進めたかったからだという。世論調査をすれば賛成派が多数を占める死刑。「だれだって実態を知らなければ是非を答えられないはずでしょう」

その年末、千葉は法務省刑事局の幹部から東京拘置所にいる二人の死刑囚の刑の執行を打診される。「よくよく勉強させてもらいます」。そう答え、二人に関する詳細な資料や、担当者による説明を求めた。

会見で千葉は「さまざまな要件、状況を検討した結果」とだけ説明している。

就任から十カ月後の一〇年七月二十八日。千葉の命令下、二人の死刑が執行された。千葉は「責任者」としてその場に立ち会った。

一人目。刑場と立ち会い室はガラスを挟んで互いに見えるが、白っぽい布で目隠しされ、表情は分からない。「バタっていうか、なんというか……」。踏み板が開いた音を千葉は今も忘れられない、いや「忘れてはいけない」と思っている。二人の執行から一カ月後、東京拘置所の刑場が初めてメディアに公開される。

死刑の在り方に関する法務省内の勉強会も設置された。千葉の願いが一步、進んだ。千葉はいわゆる「バーター」との見方を強く否定するが、サインしたことで「結果的に道が開けたかもしれない」と振り返る。

千葉が死刑執行にサインしたことについて、恵喜は交流する市原信太郎一家への手紙に「驚いた」と批判的に記している。死刑をめぐる情報公開は恵喜も望んでいたが、刑場公開の翌日、届いた新聞は関連する記事がすべて黒塗り。週末のテレビの視聴も許されなかった。「千葉法相には感謝していいのか何なのかよく分かりません」

千葉は一〇年九月に退任する。以来、死刑をめぐる議論がさして盛り上がることはなかった。あの勉強会も結論を出さぬまま一年半で解散している。 Ⅱ 続く

(敬称略)

◎上記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】 執行へ「問題なし」

千葉景子が二〇一〇年七月に命じて以来、死刑執行はしばらく無かった。再開したのは一年八カ月後、民主党、野田佳彦内閣の法相、小川敏夫だ。千葉が設立した死刑制度をめぐる勉強会を廃止したのも小川である。

「生まれながらの差別ではなく、自分がやった行為があつて死刑台に送られる」。

小川は死刑を人権と絡めて語るのは「ちよつと違う」と考えていた。そもそも「法律があり、国民が支持している」。執行後、会う人は大抵、納得してくれたという。

刑事訴訟法では、検察庁の指揮で科す他の刑罰と違い、死刑は「法相の命令による」と定められている。それゆえ、検察庁は死刑が確定すると、すぐに、執行を求める法相宛ての上申書を法務省に送る。が、実際のところ、だれをどういう順番で執行するのか、決めるのは法相ではない。

小川によると、それは「役所」だ。小川が命令書にサインした東京、広島、福岡各拘留所の三人は自ら選んだわけではなく、一カ月ほど前、法務省の刑事局から打診された。なぜ、彼らだったのか。小川は言う。「大臣にも分からない世界。ブラックボックスだ」

では、その“箱”の中とは一。

法務省での執行へ向けた手続きは、検察庁からの確定死刑囚の資料を刑事局付検事が精査するところから始まる。局付とは刑事事件の現場を踏んだ経験もある若手の精鋭たち。

ある元局付は数年前、上司の参事官からその仕事を割り当てられた。どの事件を担当しているのか、同僚にも口外せず、一人で会議室にこもり、背丈を超えるキャビネットいっぱいの資料を読む。検察が裁判で提出していない証拠があればそれも調べる。「ゼロから徹底的にチェックした」

ただ、裁判で冤罪（えんざい）につながるような重大な見落としや事実誤認がない限り、確定判決の是非には踏み込まない。この元局付は一カ月かけて、担当

した死刑囚についての見解を二十ページほどにまとめた。死刑の判断に「問題なし」と記した。

加納恵喜(けいき)の場合、前科の扱いなどをめぐり、一、二審で量刑判断が割れたが、人を殺(あや)めた事実には間違いはない。やはり局付の見解は「問題なし」だったはず。それは恵喜が死刑への階段を一段上ったことを意味する。||

続く(敬称略)

◎上記の著作権は「中日新聞」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】 『下された法相命令』

二〇一二年秋。加納恵喜(けいき)の死刑が確定してから五年半が過ぎていた。

このころ、恵喜はキリスト教への入信をきっかけに面会や手紙のやりとりを続け、  
てきた市原信太郎一家の一人娘、むうちゃんのことを「むうさん」と呼ぶようにな  
っていた。

幼稚園の年中組で一番背が高くなった五歳のむうさんと面会した後、こんなこ  
とを一家への手紙につづっている。「どんなことがあっても、むうさんがランド  
セルを背負うまで、あと一年半、がんばります」

「孫」と呼ぶ女の子の成長に目を細め、日増しに「生きたい」との思いを募ら  
せる恵喜。だが、残された時間は多くはなかった。

法務省の刑事局付検事が冤罪の可能性などを精査した後も、死刑の執行まで  
はいくつものふるいがある。

法務省刑事局の元事務官は上司の参事官から、確定順に死刑囚が一センチ幅に  
並んだリストを見せられ、備考欄のチェックを命じられたことがある。名前や罪  
名のほか、再審や恩赦の請求の有無や、心身の状態が記されていた。リストは常  
に更新され、原則として備考欄が空白の死刑囚が、執行対象となる。

執行の間隔は長すぎず、短すぎず。国政選挙中や、政治情勢が不安定なときの  
執行も好ましくない。こうした諸条件も踏まえ、刑事局長や総務課長、参事官ら  
が協議を重ねる。ある元参事官の場合、着任後すぐにリストを確認したという。  
「お膳立てが整い、相対的に確定時期が早い死刑囚を協議に諮った」。そこで  
解された死刑囚が大臣に執行を打診される。

一二年末、自民党が政権に返り咲き、法相には死刑執行に前向きな谷垣禎一が  
就く。当時、死刑囚の刑の確定から執行までの平均は五年半ほど。ちょうど恵喜  
ぐらい。恵喜には精神面での問題も無かった。

年が替わり、二月十八日の月曜日。A4判五十枚以上の書類が法務省内で回覧  
された。恵喜ら三人の死刑囚の執行に関する起案書や命令書だった。法相の谷垣

を含め、七人が決裁し、その日のうちに、三日後の執行が名古屋拘置所などに伝達された。

恵喜は二十日、それとは知らず、最後の一通を市原一家へ送っている。「桜の

開花は例年より早いようです。みなさん、お体に気を付けてお過ごし下さい。又

(また)、書き描きます。お元気で、感謝！」

拘置所の地下では、刑務官たちが執行の準備を始めていた。|| 続く (敬称略)

◎上記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『「開かずの扉」に消えた』

二〇一三年二月二十一日。加納恵喜（けいき）は前年末に移った名古屋拘置所西館八階の八二九号房でその朝を迎えた。いつも通り午前七時半に朝食。麦飯にみそ汁、おかず三品のメニューもふだんと変わりはない。およそ一時間後、刑務官に呼び出されるまで、恵喜はきょうも平穩にすぎると思っていたことだろう。

西館八階からエレベーターで二階へ。渡り廊下を東館へ向かい、その先の階段を下りると所内で「開かずの扉」とも呼ばれる、地下の刑場へ続く扉がある。

偶然だが、入所者の一人がその日、四、五人の刑務官に囲まれ、渡り廊下を歩く恵喜を目にしている。「どけっ、後ろを向け」。刑務官に怒鳴られながら、その入所者が垣間見た恵喜は暴れるでもなく、おとなしい様子だったという。開かずの扉からは、刑場に焚（た）かれる線香らしき香りがうっすらと漏れていた。

名古屋拘置所の関係者によると、恵喜は最期までひどく取り乱しはしなかった

らしい。ならば執行はこんなふうに進んだはずだ。

目には布の目隠し。後ろ手に手錠をされ、一メートル四方の踏み板に乗る。ナイロンでできた直径三センチのロープを首にかけられる。刑場の隣の小部屋には板を開くためのボタンが三つ、刑務官が三人。誰のボタンが開けたのか、分からぬよう、三人がいつせいに押す。

体は四、五メートル下まで落ち、人によって表現は違うが「ダンッ」や「ドンッ」とロープが張る音がある。吊（つ）り下がったまま、医師が心停止を確認し、さらに五分ほど置いて、ようやくロープから外される。

もし、執行の日が来たら……。恵喜は面会や手紙のやりとりを続けてきた市原信太郎一家への手紙にこう記したことがある。「死刑がつらくて泣くのではなく、泣くのでありません。別れがつらくて泣くでしょう」

最期るとき、恵喜が泣いたかどうかは分からない。拘置所関係者によると、恵喜は「死を待ち続ける生活に疲れました」と言い残した。養子縁組した母、真智子（仮名）が生前差し入れてくれたお金がまだ幾らか。市原一家の一人娘、むう

ちゃんへ、ランドセル代三万円を渡してほしいとも遺言したという。

人生で二人の罪無き命を奪った男。獄中でさまざまな人々と出会い「他人を思う心」を知ったという男。幼子の成長に目を細め「生きたい」と願い始めた男が

死んだ。死刑確定から五年十カ月。六十二歳だった。 Ⅱ 続く（この連載は12月

26日に再開予定です）（敬称略）

◎上記の著作権は「中日新聞」に帰属します

---



【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『最期の祈り 消えた』

二〇一三年二月二十一日午前。牧師の市原信太郎は出張先の宮崎県へ向かうため、東京・羽田空港の搭乗口近くで間もなくの出発を待っていた。ブブブー。スマートフォンが震え、着信を知らせる。妻の誉子（しょうこ）からだった。

「加納さんが、執行されたみたい…。いつも冷静な妻の少し上ずった声。「えっ」。出発案内が始まり、信太郎は呆然（ぼうぜん）としたまま、搭乗口へ向かった。

死刑囚は執行の直前、希望すれば最期の祈りのひとときを得られる。宗教者である教誨（きょうかい）師と面会し、少しでも心を落ち着けて踏み板に向かうためだ。信太郎は名古屋拘置所の教誨師ではないが、恵喜は「執行の日が来たら（信太郎に）最期の祈りに立ち会ってほしい」と拘置所へ願っていた。信太郎もそれを望んでいたのだが…。「何の連絡もないなんて」。信太郎は機上で歯がみし

た。

\*命は重い。だから…

名古屋拘置所の関係者によると、加納恵喜（けいき）の刑の執行が事前に堀の外へ伝えられることは一切なかった。ふつう、最期に面会する拘置所の教誨（きょうかい）師には二〜三日前に立ち会いの依頼があるのだが、恵喜の場合、担当教誨師の野村潔がたまたま海外に出張中で、それすらなされていない。

恵喜は生前、執行前の市原信太郎との面会について刑務官から「期待に沿った」と言われたと、信太郎への手紙でうれしそうに知らせている。が、いち刑務官にそんな判断ができるはずもない。

獄中でキリスト教の洗礼を授かり、それを縁に大勢の人々と出会った恵喜。最期の祈りに立ち会ったのは、見知らぬ仏教の教誨師だったという。「どんな思いで逝ったのか」。信太郎は今も納得がいかない。

執行後、つまり、すべてが終わった後、拘置所から恵喜が所属するキリスト教会に連絡があり、その関係者が市原家の居間の電話を鳴らした。

受話器を取った信太郎の妻、誉子（しょうこ）は簡単な受け答えで切った。隣にいる娘、むうちゃんに内容をさとられたくなかった。

「どんな人の命でも重い」。誉子はそう思う。「その命を奪うことは絶対に許されない」。だから、重い命を二つも奪った恵喜の罪は許されるものではない。人を殺（あや）めるといふ罪がどうすれば贖（あがな）えるのか、誉子には分からない。

ただ、これは分かる。面会でアクリル板越しに、娘と向き合う恵喜はただの「好々爺（こうこうや）」だった。赤ん坊のころから、立ち、歩き、話し、歌い、踊るようになっていった、むうちゃん。その成長を見たがった恵喜の姿が偽りはずがない。その命を奪うしかなかったとは、どうしても思えない。

執行の翌日、二十二日の夕暮れ。誉子が家のポストをのぞくと恵喜が二日前に出した最後の手紙が届いていた。取り出したのは、むうちゃん。いつもの白い封筒を開き、いつもと変わらぬ内容を、いつも通り読み聞かせた。

でも、いつもの面会はもう二度とない。「けっけちゃん、具合が悪くなって死

んじゃったんだって」。そう告げたのは執行から一週間がすぎたころ。まだ五歳。死ぬ、という意味がよく分からなかったのか、むうちゃんはただ、きよとんとし  
ていた。 || 続く (敬称略)

◎上記の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『早く出会えていたら』

肉親との縁はとうに断たれ、養子縁組した母、真智子（仮名）も既がない。加納恵喜（けいき）の遺体は名古屋拘置所が火葬し、遺骨は所属したキリスト教会に引き取られた。

執行から二週間余り。名古屋市内の教会で小さな葬送式があった。参列したのは、獄中の恵喜と向き合ってきた二十人ほど。もちろん、十年近く交流してきた牧師の市原信太郎一家もいる。祭壇には一家の一人娘、むうちゃん手書きの恵喜の似顔絵が飾られた。「2月21日にしんじやった 62さいにしんじやった」。ただどしどしい文字に囲まれ、恵喜は笑っていた。

式の途中、あいさつに立った信太郎は真智子やまな娘を例に挙げ、こう言った。「恵喜さんを変えたのは彼が（死刑という）罰に直面したからではなく、多くの人々との出会いがあったから」

名古屋でスナックママを殺（あや）めた事件後、恵喜が獄中からの最初の一通を出した牧師の戸田裕（80）は式場で、恵喜との問答を思い返していた。「命をもって償う」「そんなに重い命なら、なぜ簡単に消したんだ」。数年前に教会の仕事は引退。二〇〇七年春、恵喜が死刑囚となり、外部との交流が制限されてからは疎遠になっていた。「彼は命の重みを分かったのだろうか」。答えはない。

逮捕直後の恵喜と留置場で同房となり、恵喜がキリスト教と出会うきっかけになったクリスチャンの沢田竜一（54）は式に出していない。堀の外へ出て七年。今は仕事を得て、家族三人でささやかに暮らす。出所後、面会を求めても「過去を忘れて生きてほしい」と恵喜はあえて拒絶した。その死は執行翌日のニュースで知った。ショックだった。「刑務所で何十年もすごした経験を伝えるのも償いの一つではないか。生きていてほしかった」

参列者には恵喜が「仙人」と呼んだ男性（70）もいた。恵喜とは時期も場所もかぶっていないが、仙人も堀の中にいたことがある。五十歳を過ぎて出所後、

更生施設で暮らしながら仕事を見つけて自立した。今は死刑囚やホームレス支援に携わり、死刑確定前の恵喜とも面会を重ねてきた。二度の殺人を犯した恵喜に同情はしない。ただ「どこかで、だれかに相談していれば…」とは思う。

獄中で触れた、さまざまな人のぬくもり。「もつと早く出会いたかった」。恵喜はよく言っていた。 Ⅱ続く (敬称略)

◎上記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

中日新聞社 二〇一四年二月二八日

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『もっと変わったはず』

踏み切れない。面会でよくよく尋ねれば、いつときの気分で言っただけで、本心から望んでいたわけではなかった。

弁護士の湯山孝弘は二〇一三年二月二十一日、牧師の市原信太郎からの連絡で加納恵喜（けいき）の刑の執行を知った。恵喜の上告審を担当した国選弁護人。○七年三月の上告棄却で本来の役目は終わったが、東京から恵喜のいる名古屋拘置所へ通い続けた。

一〇年九月に恩赦が不相当とされると、すぐ二度目の出願。今度は、信太郎の上申書を添えた。「いまの加納さんはそのときとは全く違う人に変えられ、新しい命を生きています」。が、それも一二年九月には退けられる。執行はその五カ月後だった。

「彼はやんちゃなワル。平気どうそを言う」。そう感じながらも、一人の人間として向き合うことをやめなかった。

恵喜に「振り回されたこともある」と湯山。それでも見極めたいことがあった。面会のたび、こう訴えた。「自らの罪を真正面から受け止めなきゃだめだ」

「もう死刑でいい」。恵喜はそう言い放つ一方で、執行を恐れていた。恵喜と養子縁組した母、真智子（仮名）が亡くなって半年余の○八年十二月、湯山はそれを感じ取り、恩赦を出願した。恐れがいくらか和らいだように見えたのもつか

とでもある。恵喜にとっては考えたくないことだったかもしれない。ただ、恵喜は湯山のことを「友だち」と呼び、少なくとも、その言に耳を閉ざすことはなかった。

の間、○九年五月には恵喜から再審請求を望む手紙が届く。湯山にすれば、まだ恩赦の結果が出ていないし、再審請求となれば新証拠が必要となるため軽々には

が、恵喜は本当に罪と向き合い、反省したのか。九年近く付き合った湯山にして、今も分からない。

ただ、もしも…と思うことはある。例えば、信太郎の一人娘むうちゃんが恵喜の事件を理解できるまで成長し「どうして人を殺したの」と尋ねたらどうか。恵喜は罪から目をそらすことができただろうか。「もし、もっと生きていたら、もっと変わった。その可能性がある人を殺してしまった」。湯山はそう思う。 Ⅱ

続く（敬称略）

◎上記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】 執行しやすい条件

浦市で無差別に九人を連続殺傷し、二年後、水戸地裁での死刑判決が確定していた。

裁判で金川は凶行の理由を「死刑になるため」と言い放った。この世はつまらない、生きている意味はない、でも自殺は痛い、それなら国に殺してもらおう。異様な論理を振りかざし、死刑を宣告されると、笑みをこぼした。判決後、弁護人は控訴したが、すぐに本人が取り下げている。

金川の国選弁護人だった山形学（45）はその言いさまが「本音だった」と振り返る。「女の子と付き合ったことないだろ」「面白いゲームが出るかもよ」。何とか生への未練を引きだそうとしたが「死」への執着は揺るがなかったという。

〈写真 黒塗りで情報公開された恵喜（右）と金川の執行の報告書。5番目の心情・遺言を記す欄の幅が大きく違う〉

二〇一三年二月二十一日。幼子の成長に目を細め、「生きたい」と願い始めていた加納恵喜（けいき）と同じ日、「死にたい」と望んだ男が死んでいる。東京拘置所で執行された金川真大（まさひろ）（29）。二〇〇八年三月、茨城県土

だれを執行するか。法務省が持つ死刑囚リストの備考欄に再審請求や、恩赦の出願中とあれば、執行は敬遠される傾向がある。昨年十二月時点で、確定死刑囚百二十九人のうち、八十五人が再審請求を、二十六人が恩赦を求めている。執行が滞れば、死刑囚の人数は増え続ける。法務省刑事局の元検事は「事務方としては年に二、三回は執行したい気持ちがある」と打ち明ける。



死を強く望んだからだろう。金川の執行は確定から三年一カ月。当時、五年半ほどだった平均より随分と早い。山形は言う。「彼にとって死刑は罰ではない。ああいう人間を生み出さないため、どうすればいいのか、きちんと研究するべきだった」

恵喜の執行は二度目の恩赦が不相当とされてから半年とたっていないかった。もう一人、奈良女児誘拐殺人の小林薫（44）も同じ日に執行されているが、恩赦や再審請求を退けられ、新たに再審を求めようと準備中だった。

情報公開された法務省の執行の報告書には死刑囚の心情や遺言を記す欄がある。すべて黒塗りで内容は分からないが、分量を比べると、恵喜は金川の四倍はある。獄中で多くの人々と触れ「人のぬくもりを知った」という恵喜には言い残したいこと、言い残したい相手があった。だが、執行する側からみれば、金川も、小林も、そして恵喜も同じ、執行に支障のない死刑囚だった。 || 続く（敬称略）

◎上記記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します



【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『寂しさ埋まらぬまま』

加納恵喜（けいき）の刑が執行された二〇一三年二月二十一日。須藤正夫（74）  
Ⅱ仮名Ⅱは、それを知り、何を感じたか、よく覚えていないという。

○二年三月、恵喜がその人生で手にかけた二人目の犠牲者、名古屋のスナック  
ママ、千葉春江。籍こそ入れていなかったが、二十年以上、夫婦として連れ添っ  
たのが正夫だ。現場に駆け付け、変わり果てた女房を目の当たりにした。事件か  
ら二カ月後の初公判では傍聴席から恵喜に殴りかかった。恵喜の死刑が確定した  
七年前、春江が眠る故郷、群馬県の寺へ出かけ、墓前に報告もしている。ようや  
く迎えた望み通りの結末、「死」一。  
その日、夕刻に立ち寄った料理屋かどこかで、ふと手に取った夕刊の、白抜き  
見出しが目に飛び込んだ。「3人の死刑執行」「栄のスナック強殺」。自宅に戻  
り、コンビニで買い込んだ何紙かの記事をハサミで切り抜きした。うれしかった

のか、満足したのか、それとも…。「おれの方が先に死ななかったな」。うっす  
ら、そんなことが頭をよぎった気はする。

恵喜が獄中で記した多くの手紙やはがきの中で、正夫に宛てたのはたった一通  
しかない。正夫は鼻をかんで捨てた。恵喜は養子縁組した母、真智子（仮名）に  
促され、春江の妹へ手紙を書いたこともあるが、真智子が病で倒れたこともあり、  
出すことはなかった。

「死刑で当然」。今も正夫の考えに変わりはない。女房の命を奪い、まともに  
反省したとも思えない。ただ、近ごろは怒り続けることに少し疲れた。「振り返  
るのがつらい」

春江が死に、二人の娘も独立した。二階建てのがらんとした家での一人暮らし。  
ほそぼそと金融の仕事が続けているが、人と会う機会も減った。足腰が衰えぬよ  
う、昼前に散歩するのが日課だ。春江の妹もまた、知人によると「もう忘れたい」  
と言い、事件を振り返ろうとしない。恵喜の執行は半年以上たってから、知った  
という。

「春江というかけがえのない一人が殺されたことがすべて。何があっても今さら、それは変わらない」と正夫。散歩コースの公園で、同じ年ごろの夫婦が散歩したり、孫を連れているのをよく見かける。たまらなく寂しい。恵喜の死がそれを埋めてくれることはない。 Ⅱ 続く (敬称略)

◎上記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『一粒の麦になろう』

藤井は恵喜との交流を「宝物でした」と話す。加納恵喜（けいき）の死刑執行から一年余の今年二月二十三日、小柄な女性が一人、恵喜が籍を置いた名古屋市内の教会を訪ねた。礼拝で冥福を祈ると、安置されている恵喜の骨つぼから一片の骨をそっと手に取る。「一生懸命生きられたんですね」。か細く震える声で、そう語りかけた。

恵喜と養子縁組した母、真智子（仮名）の最期をみとった大阪市内の淀川キリスト教病院付きの牧師藤井理恵（54）。がんを発症し、死を予感した真智子に「少しでも支えてあげてほしい」と頼まれ、二〇〇七年春ごろから恵喜と文通を続けてきた。長年ホスピスで末期患者に寄り添い、死を間近に見てきた藤井だが、死刑囚と接するのは初めてだった。

〇八年一月のことだ。藤井は阪神大震災でアパートが全壊して亡くなった兵庫

県芦屋市の米津漢之（くにゆき）という小学一年生の男の子の日記のコピーを手紙に同封したことがある。震災の前日、家族でカレーを作り置きしたという男の子は「あした、たべるのがたのしみです」とつぶっていた。

人生で二人もの「あした」を奪い、刑死を待つ恵喜と、天災で「あした」を奪われた男の子では「死」の意味を比べようもない。しかし、執行の恐怖に震える恵喜はいたく心打たれたようだった。被害者や遺族からすれば、身勝手にすぎる理屈だが、藤井への手紙にこう感想を記した。「自分の命すら自分でコントロールできない。死ならず生も思い悩むことはない」

実は、日記のコピーを恵喜に送るよう発案したのは当時、小学六年生の藤井の一人娘だった。あの男の子の担任だった先生が、そのころ、偶然、娘を受け持っていた。日記は命の大切さを伝える教材として語り継がれ、それが娘から藤井へ、そして恵喜へ。恵喜は藤井にこうも伝えた。「人の人生は他の人の心の中で生きていくんでしょ。善悪共にです」

恵喜の死後、藤井は遺品の聖書を引き取っている。赤いしおりひもが挟まれて

いたページに恵喜が好んだ一節がある。「一粒の麦は地に落ちて死ななければ一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ」

恵喜は「一粒の麦」のように自らの死に意味を見いだそうとしていた。その運

命は自身の罪が招いたものだったが…。|| 続く (敬称略)

◎上記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『死の意味に向き合う』

加納恵喜(けいき)と文通していた淀川キリスト教病院付きの牧師藤井理恵(54)には娘が一人いる。女の子では珍しいが、彼女が自分のことを「わし」と言うので、恵喜から「わしさん」と呼ばれていた。

恵喜が死刑執行された二〇一三年二月二十一日、わしさんはまだ雪深い山形県のキリスト教系の高校にいた。実家のある兵庫県芦屋市を離れ、テレビもケータイもない寮生活。夜、寮の管理人宅で、母からの電話を取った。「恵喜さんが天国に行きました」

夜通し泣きじゃくった。ベッドの中、極端な思いがわき上がる。「大切な人が奪われた。殺した相手を殺したい」。翌日の朝刊。執行を伝える記事に添えられた写真の法相をにらんだ。それから数日は寝込み、授業にも出られなかった。

わしさんにとって恵喜は「友人」だった。小学生のころから母の文通相手として知っていた。高校に入ると、家にあった恵喜からのすべての手紙を読み、母に

代筆してもらう形で、自らも文(ふみ)のやりとりを始めた。

獄中で刑死を待つ男は「優しく、賢い、しょうもない冗談も書くおっちゃん」だった。ただし、その身に「死」が迫る。「死をどう受け止めればいいのか。自分はどう生きるべきか」。思春期らしい悩みを重ね、そうつぶつたら、恵喜が返した。「生と死は背中合わせですから遠いものではありません。(中略) 出会いの喜び、別れの悲しみを知って成長してほしい」

「友人」を殺した死刑制度を認める気にはなれない。ただ、時が気付かせてくれたこともある。

わしさんは恵喜の事件のことを直接、尋ねたことも、詳しく調べたこともなかった。その人生で何の罪もない二人を殺(あや)めたのが他ならぬ「優しい、おっちゃん」だ。この不都合な事実を「無意識に避けていたのかもしれない」という。自身でさえ、そうなのだから、被害者の遺族が「殺したい」と憎むのも「当然」だと徐々に思えるようになった。

三年生になったわしさんは迷っていた進路を大学に定めた。「私は狭い世界に

いる」。昨秋、大学の推薦入試の論文に、恵喜のことを記し、こう願った。「死  
刑について、命や人間について、他者と思いを伝え合って、より本質に近づきた  
い」

まだ十八歳。この春、大学生になる。|| 続く（敬称略）

◎上記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---

【二月二十一日 ある死刑囚の記録】『償いにはならないが』

今年の二月二十一日の朝。市原誉子（しょうこ）（48）が自宅の居間のカーテンを開けると、一年前と同じような青空が広がっていた。ミッション系の幼稚園に通う一人娘のむうちちゃん（6つ）が、制服姿で二階から下りてくる。

「去年の今日、けっけちゃん死んじゃった日だよ。幼稚園でお祈りする？」

「うん」

誉子は窓際にある鉢植えのピンクのマーガレットを二輪、空き瓶にさし、むうちちゃんに持たせた。登園したむうちちゃんは、園の祭壇に花を供え、小さな手を合わせると、足早に教室へ向かった。

けっけちゃんこと、加納恵喜（けいき）が刑を執行されるまで十年近く交流してきた市原一家。生後二カ月、誉子に抱かれて初めて面会室にやってきた、むうちちゃんを見て、恵喜は手紙にこう、つぶった。「無垢（むく）でいいですね。こ

のくらいにかえれたら…」

誉子の夫、信太郎（49）は、恵喜のこんな言葉が今も耳に残る。むうちちゃんが二歳くらいだったか。「もし、むうちちゃんが何かされたら、この壁をぶち破って相手を罰したい。でも、それは自分にも当てはまるんですよ…」。たぶん、恵喜は自らの人生を振り返り、罪を悔いていたのだろう。だが、その罪と向き合い、償おうとしたのか。

「死んで償う」。しばしばそんなことを言い、死刑を望んだこともあった恵喜。

信太郎は言う。「自分ではどうしようもない状態から目を背けていただけじゃないか」。その死が償いになったとは思えない。

恵喜は手紙や日記で、しばしば事件を振り返ったり、被害者の冥福を祈っているが、時がたつに連れ、そうした記述が減っていたのも事実だ。二人の命を奪った男がその罪を心から反省し、贖罪（しょくざい）の気持ちを抱いて逝った。そんな美しいストーリーは描けない。ただ、養子縁組した母、真智子（仮名）や、むうちちゃん…。「交流した人たちに『ありがとう』と、感謝して亡くなったと思

う」。誉子は恵喜が「ふつうのおじさん」になって死んでいったと信じる。

「むうちゃんのランドセルを買ってください」。恵喜が残したお金で、市原夫妻は水色のランドセルを注文した。もうじき、むうちゃんはそれを背負って小学校に通う。

その人生も、獄中での思いも、ほとんど語られたことのない死刑囚だった恵喜生前、市原夫妻にこう尋ねたことがある。「もし、むうちゃんが自分のやったことを知っても、それでも会いにきてくれるでしょうか」。誉子はいつか、恵喜のことをその罪も含め、語り聞かせるつもりだ。恵喜のために祈り続けるかどうか。そのうえで、むうちゃん自身が決めればいい。（敬称略） || 終わり

◎上記記事の著作権は「[中日新聞](#)」に帰属します

---